



SRI SATHYA SAI RAM NEWS

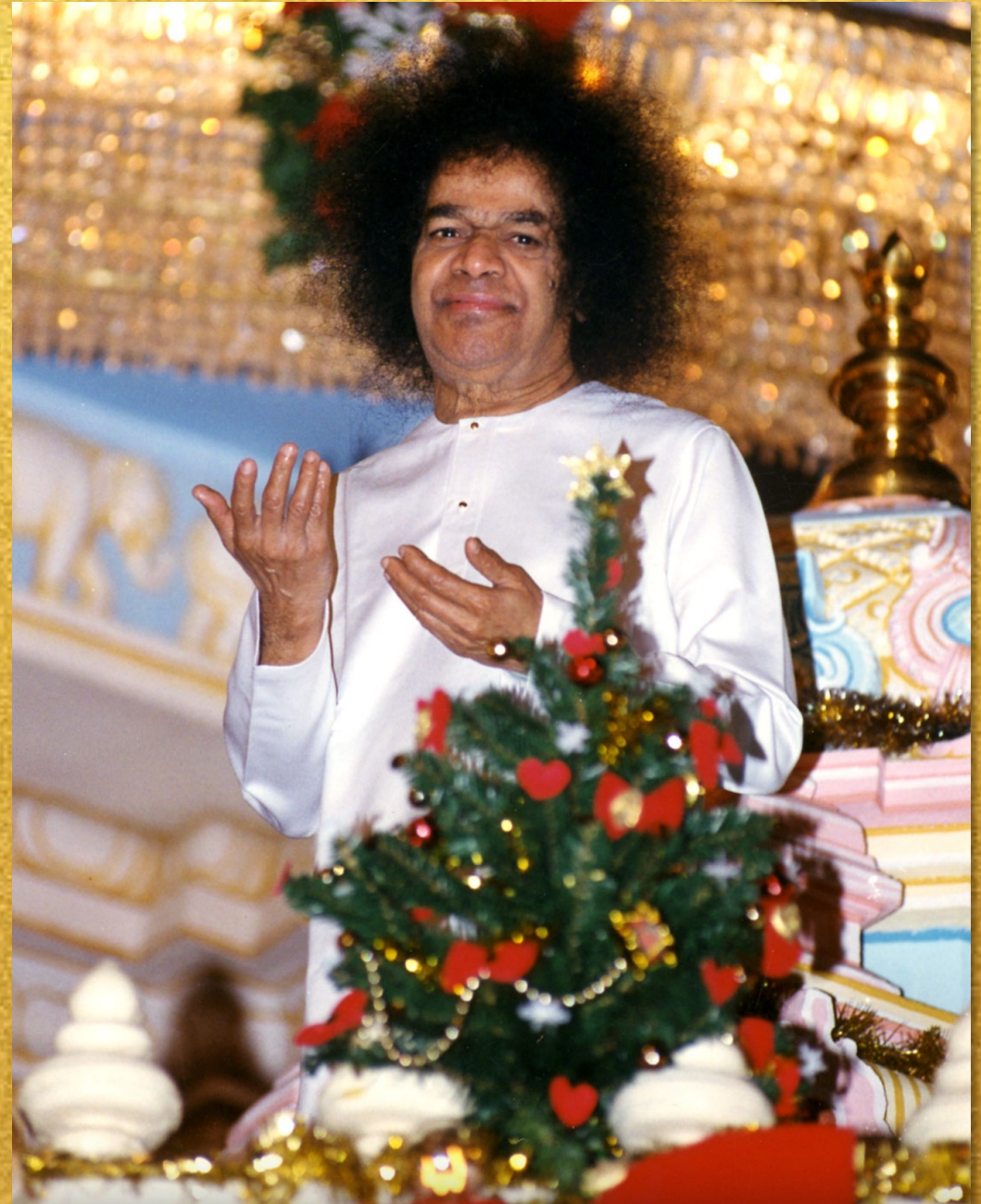
LOVE ALL SERVE ALL
HELP EVER HURT NEVER

No.212/12月/2022



CONTENTS

- サイの御教え
 - 「愛によってもたらされる神性」
 - 「あなたのハートの中に寺社を建立しなさい」
- Sri Sathya Sai Baba 様ご生誕100周年記念ヴィジョン
 - 「海と波のおはなし」
- サッティヤム・シヴァム・スンドラム
- サイと共に
- ワカ チンナ カタ
- 活動報告1：多摩グループ17周年記念祭
- 活動報告2：福岡グループ28周年記念祭
- 活動報告3：ナヴァラートリ2022
- 活動報告4：スタディーサークル





SRI SATHYA SAI RAM NEWS



サイの御教え



さまざまな信仰を持つ男女が、世界各地から愛と謙虚さを携えて
快適か快適でないかを気にかけることなく
数々の苦難に耐えながら、ここに集まった
すべてはババの恩寵を得るために！

蔓延（まんえん）する無神論を払拭し、神への信仰を植え付ける
すべてを包み込むサイの愛が人類を変容させ、神へと導いている

ॐ

サイの御教え

1987年クリスマスの
ババの御講話愛によって
もたらされる神性

さまざまな信仰を持つ男女が、
世界各地から愛と謙虚さを携えて、
快適か快適でないかを気にすることなく、
数々の苦難に耐えながら、ここに集まった
すべてはババの恩寵を得るために！
蔓延（まんえん）する無神論を払拭し、
神への信仰を植え付ける、
すべてを包み込むサイの愛が、
人類を変容させ、神へと導いている

神の愛の化身たちよ！人間は、身体的には基本的な違いはありませんが、習慣や考えや感情には多くの違いが見られます。すべての国は人間の集合体です。世界全体の自然環境はそれほど違いませんが、諸国の人間社会における生活様式の違いはかなりのものです。これは人間の状態の大きな特徴の一つです。

真理は一つです。真理は心（マインド）や言葉を超えています。真理は時間や空間というカテゴリーを超えています。数え切れないほどの求道者が真理を認識するためにさまざまな道を追求してきました。真理を求める人々の間には顕著な違いが存在します。この違いは宇宙の本質に影響を与えるものではありません。逆に、こうした違いは宇宙のプロセスを理解する上でのさまざまな段階であると考えなければなりません。こうした違いこそが、統一的な原理を

探求し続けることを促してきたのです。

究極の真理は一つ

インドの形而上学の六つの学派（シャド ダルシャナ）〔六派哲学〕は、過去の偉大な求道者たちによって私たちに提供されてきました。この神聖な教えは、今日ではほとんど注目されていません。それぞれのダルシャナ〔学派〕が示している霊的な道は異なるように見えますが、目的は共通しており、彼らが宣言する究極の真理は一つです。国内におけるさまざまな宗派や共同体の違いや、人々の間に蔓延してきた唯物論のせいで、六つのダルシャナの教義は真剣に追求されていません。唯物論の教義があまりにも世界を席卷しているため、インドの形而上学〔六派哲学〕の偉大さが評価されていません。この哲学を適切に検討するための環境さえも存在していないように見えます。

唯物論者の教義は、チャイタニヤ（意識／チャイタンニヤ）は感覚的な経験の産物である、そして、意識の進化は物質の進化に依存し、物質の進化に基づくものであるという前提で進んでいます。無生物である物質が、唯物論者の教義の基礎になっているのです。物質は有限です。ヴェーダの教義は、意識は体の感覚から生じるものであり、体の感覚は有限で限られた物質に起因するものによって制限されて

いる、という見解を否定しています。意識に対する物質の優位性という概念の誤りを示すために、この唯物論的な教義とは真逆の、アーディヤートミカ〔アートマに關係する〕（霊的）な見解が投げられたのです。

人間と自然

霊的な見解では、基本はアートマ（神霊）〔真我〕です。アートマは無限です。ヴェーダーンタの教義は真我の無限性を宣言し、物質は不活性で有限であることを指摘しました。シュルティ〔ヴェーダ〕は宣言しています。

トリパーダッスヤームルタム デイヴィ
〔彼の輝きの4分の3は不滅の領域にある〕
〔プルシャ スークタムより〕

4分の3を意識が占め、4分の1は不活性な物質です。したがって、物質を動かしているのは意識であって、物質が意識を生み出しているのではないのです。これは霊的な概念の本質です。

ウールドヴァ ムーラム アダハサークハ
（根は高いところにあり、
宇宙の木の枝は下にある）

とギターは述べています。これは、物質である宇宙は普遍意識から生じたという見解をさらに裏付けるものです。

ジャダ（物質）を活性化しているのはチャイタニヤ（意識／チャイタンニヤ）であり、意識を生み出しているのは物質ではありません。現代のテクノロジーは、素晴らしい機器を生み出し、新しいエネルギー源を利用し、宇宙空間の月や他の惑星を探索する宇宙船を作り出しました。しかし、これらの機器はすべて自力で作動しますか？ いいえ、しません。その背後には人間の創意工夫と知性があるのです。どんな機械より人間のほうが偉大です。

人間は意識の化身です。機械を動かすのは意識であり、不活性な物質は意識を創造することができないというのは、議論の余地がないほど明らかです。人間は創造物の中で最も高次のものです。人間は、自然に支配される動物のような本能の生き物であるはずではなく、自然の主人になるべきです。人間は、ナラ（人間）からナーラーヤナ（神）へと進歩しなければなりません。知的な人間として、自分はサムサーラ（サンサーラ／世俗の鎖）に縛られていると考えるべきではありません。人間を縛っているのはこの世ではありません。この世には、見る目もつかむ手もありません。人間は自分自身の思考と欲望に捕らわれているのです。はかないものや壊れやすい

ものに執着する中で、人間は自分が生来持っている神性を忘れてしまい、宇宙のすべてのものは神から来ていて、神の力なしには存在できないということを理解していないのです。

宇宙における神性

宇宙は、永遠なるものである無限の実在（ブラフマン）の投影であり、ブラフマンとは別のものではありません。

サルヴァム ヴィシュヌマヤム ジャガト
（全世界には神が浸透している）

この真実が認識されれば、人が知覚したり経験したりするものはすべて神の顕現であることが明らかになるでしょう。すべての木はカルパヴリクシャ（願いをかなえる木）です。すべての仕事場は神の社（やしろ）です。多くの人は、自分は神との一体感を実現するために霊性修行に取り組んでいると思っています。さまざまな霊性修行やさまざまな形式の礼拝は、個人的な満足感を与えるかもしれませんが、神の悟りをもたらしません。神は誰からも何も必要としません。神は供物を求めず、供物を喜ぶこともありません。神はあなたと違います。あなたを神から引き離しているのは、あなたの好き嫌いです。欲望や嫌悪感を取り除いたとき、あなたは自

分が生来持っている神性に気づくでしょう。人が行っているあらゆる霊性修行、あるいは、供養礼拝における儀式の遵守は、心（マインド）を浄化してエゴをなくすのに役立つだけです。人類は、すべての人間に内在する神性を認識することによって、人類の一体性という理想を目指して努力すべきです。

罪と悔い改め

キリスト教徒の間では、自分の罪を許してくださいと神に祈るという古くからの習慣があります。教会には、信徒が自分の罪を告白し、現金を供えて、教皇や司祭から贖罪（しょくざい）を得るという習慣があります。悔い改めと神への供物によって罪があがなうという信仰は、インドでも広く浸透しています。こうした習慣は、神に対する誤った認識に基づいています。人々は、神の本質を真剣に探究し、真実に基づかない迷信的な信仰を一掃するよう努めるべきです。

探求の精神は、キリストより何世紀も前に古代ギリシャ人の間で広まっていたということに注目すべきです。ソクラテスは、アテネの若者たちに探究心を芽生えさせた偉大な師です。ソクラテスは、真理を追求するあまり、弟子の助けを借りて逃亡するよりも、故郷での死を選びました。ソクラテスは、命にも財産にも所有物にも価値を置きませんでした。

イエスと金持ちの男

イエスも富や地位に価値を置きませんでした。イエスがマルタとマリアの家に行った時、ある金持ちがイエスのもとを訪れました。その金持ちは、自分はあらゆる財産を持っているにもかかわらず心の平安がないのだとイエスに言いました。彼は多くの心配ごとで悩まされており、出口を示してほしいとイエスに訴えました。イエスは彼に言いました。「簡単な方法がありますが、あなたはそれに従いますか？あなたは富を蓄え、それに伴って心配ごとが増えていきます。いつかは置いて逝かなければならないその富を、あなたはどうするつもりですか？貧しい人や困っている人に分けてあげれば、あなたの心配ごとはなくなるでしょう。人類同胞を愛することによって、財産ではなく神の恵みという富を蓄えなさい」

これは、今日、理解されなければならないメッセージです。人々が求めるべきことは、神の愛を得ることです。それ以外の富の形は、学識という富も含めて、価値のないものです。

イエスは、富める者に厳しくし、貧しい人や病人に尽くすことによって、神への信仰に基づいた新たな生き方を弟子たちに教えました。神の使者としての聖職を始めたイエスは、最終的に「私の父と私は一つである」と明言しました。聖パウロは、最初イ

イエスを頑固に批判していましたが、夢でキリストを見て、その夢の中でイエスに「すべての人は神の火花である。私を憎むことはあなた自身を憎むことであり、神を憎むことである」と言われてから、キリスト教の最初の伝道師になりました。キリストのメッセージを広める中で、パウロは多くの試練に直面しました。初期のキリスト教徒たちは、ローマの支配者たちによる迫害を受けました。時が経つにつれ、キリスト教の信仰はローマに定着し、ローマはカトリック教会の本拠地となりました。

「天の国はあなたの中にある」

キリストは、神は愛によってのみ悟ることできると明言しました。ある時、エルサレムの大祭司がイエスを呼んで尋ねました。「そなたはユダヤ人の王なのか？」イエスは「私はそうは言っていません」と答えました。大祭司はイエスに言いました。「そなたは間違った教えで人々を迷わせている。そなたは人々に、皆そなたを通してのみ天国に入れると言っている」。イエスは、自分は人々に天の王国を求めると言っているのだと述べました。祭司は「その王国はどこにあるのか？」と尋ねました。イエスは答えました。「天の王国は、あなたの中に、万人の中にあります。これが私の教えであるとき、どうして私が天の王国は私を通してのみ到達できると主張していると非難されることができませんか？」

イエスはこのように話す勇気をどうやって得たのでしょうか？ それはイエスが真実を公言していたからです。真実は愛から生まれ、愛は神への信心から生まれます。

信あるところ、愛あり
愛あるところ、平安あり
平安あるところ、真実あり
真実あるところ、至福あり
至福あるところ、神あり

バーラタ〔インドの呼称／神を愛するものの意〕では、神性はブラフマー神、ヴィシュヌ神、マヘーシュワラ神〔シヴァ神〕という三つの姿で存在すると信じられています。これら異なる姿の神を見た人は誰もいません。これらの形態は特定の方法で信仰を深めるために考え出されたものです。この三位一体の神は、誰の中にも象徴として存在しています。ハートはイーシュワラ〔シヴァ神〕と見なされず。その意味は、ハートは人間の内にあるアートマ原理を象徴しているということです。このハートというのは肉体の心臓のことではなく、霊的なハートのことです。ハートは神性と愛の原理を表しています。アートマは限りないものであり、ですから、愛にも限界はありません。心の狭い人々は自分の愛に限界を設けるかもしれませんが、神の特性としての愛は無限です。

「あなたは神」

心（マインド）はハートから生じました。心（マインド）はすべてに浸透しています。

マノームーラム イダム ジャガト
（心は宇宙の土台）

心（マインド）はヴィシュヌ神を象徴しています。「ヴィシュヌ」という単語は「宇宙のあらゆるものに浸透しているもの」を意味します。心（マインド）がハートから生じたように、ヴィシュヌの原理はイーシュワラの原理から生じました。ブラフマーはヴィシュヌから生じたと言われていています。人間においては、心（マインド）からアハム（自我）が生じ、ブラフマーはアハムの象徴です。これが三位一体の神の深遠な解釈です。三位一体の神は誰の中にも存在するということです。ハートはイーシュワラ、心（マインド）はヴィシュヌ、そして、「私」はブラフマーです。自己をブラフマー神と見なせば、あなたの思考と行いは道から外れなくなるでしょう。心（マインド）は中にある不純物を取り除くことによって、解脱を得る手段となります。すべての霊性修行は心（マインド）を浄化するためだけにあるのです。心（マインド）が清らかになれば、おのずと神を経験することができます。

神はあなたと別のものではありません。あなたは神です。この確信があなたの中で大きくならなければなりません。最初のうちは、あなたは自分を単なる人間だと思っています。それから、自分の潜在的な神性に気づく段階に到達します。最終的に、あなたは自分の神性を理解する段階に到達します。この3つの段階はイエスの生涯にも見ることができます。最初、イエスは「私は神の使者です」と明言しました。次に、イエスは「私は神の子です」と言いました。最終的に、イエスは「私と私の父とは一つです」と断言しました。こうした過程を経て、キリストは神との一つになることを達成したのです。

あなたは、今この瞬間から、神と一つになるための旅に出なければなりません。時間は誰のことも待ってはくれません。すべての努力を、神を悟ることに傾けなさい。そのためにはまず、エゴをなくすことが必要です。エゴを取り除かなければ、神性の至福を経験することはできません。これ見よがしの礼拝は用をなしません。富も権力も地位も、霊的な探求には役に立ちません。それらは平安を与えることも、人間に常につきまとう恐怖を取り除くこともできません。信仰心のある人だけが、恐怖から完全に解放されます。ですから、神への信仰を深め、神に導かれた人生を送りなさい。神への信仰を手放さなくても、学問や趣味を追求することはできます。今起こっていることは、人々は富を追求する

中で神を忘れていているということです。人々はアートマ〔真我〕ではなくアンナム（食べ物）を求めています。アートマを悟れば、他のすべてのものは大きな努力なしで得られるでしょう。

3つの格言を心に留めていなさい

真我を悟った人は自分の人生を救ったのです。自分の欠点を自覚している人は祝福されています。他人の良いところを見る人も、同様に祝福されています。すべての人に愛を示しなさい。

今日、ここに多くの国から人々が集まっています。彼らは何のためにここに来たのでしょうか？ 彼らは富を欠いていません。快適さも欠いていません。彼らは自国でいろいろなことを楽しんでいます。しかし、彼らは霊的な悟りからのみ生じることのできる真の至福を経験していません。そして、そのために彼らはやって来たのです。自分の心（マインド）をアートマ〔真我〕に向けなさい。アートマは無限です。「私のもの」、「あなたのもの」という考えを捨てなさい。自分たちは全世界の守護者である一なる神の子供であると考えなさい。三つのことを心に留めなさい。それは、神への愛、罪への恐れ、社会の道徳を守ることです。

神への愛のない人は、簡単に罪を犯し、すべての道徳的価値を失います。神への愛は罪への恐れを強め、その人に道徳的な生活を送らせます。この三位一体の原則は、三位一体の神のようなものです。それはトリカラナ シュッディ（思考と言葉と行いの清らかさ）を助長します。その清らかさを備えて行うことは何であれ、神の悟りの助けとなります。何よりも、愛を育みなさい。皆さんをここに連れてきたのは、愛です。愛を強めなさい。愛は神です。愛の中で生きなさい。どのような礼拝の形を選んでも、あなたの好むどのような霊的な道をたどってもかまいません。あなたのハートを喜ばせるものは何であれ、神を喜ばせるでしょう。あなたの良心の指示に従い、ハートを愛で満たし、神の至福に浸りなさい。

サティヤサイ ババ述

1987年12月25日

前例のない外国人とインド人の信者の集まりへの

クリスマス メッセージ

プールナチャンドラ講堂にて

Sathya Sai Speaks Vol.4 C4



サイの御教え

グントウールでの
新マンディル落成式での
ババの御講話

あなたのハートの中に
寺社を建立しなさい



このマンディル（寺社）を建てたのは皆さんです。それは私を満足させることではありません。皆さんのハートの中に建てられた寺社だけが、永久的なものです。寺社の建設に費やされる金額は、貧しい人々や困っている人々への奉仕のために、もっと有効に使うことができたでしょう。

人間のほとんどすべての活動は、スワールタム（利己心）に動機づけられています。利己心は、人間の中に内在する神性と対立するものです。その神性を顕現させることなしに、人間はどうやって内的にも外的にも平安を達成することができますか？

個人・社会・世界——この3つは表裏一体です。個人の福祉は、国家の状態に左右されます。誰もが自分の霊的な資質を高め、それを地域社会や国の利益の増進に役立てるよう努力すべきです。社会への奉仕が、個々人の絶えざる関心事になるべきです。

人間の内にある性質の中で、無私の愛に優るものはありません。無私の愛は、他者への奉仕として自らを現します。そのような愛は、真の至福の源泉です。

カルマとカルマヨーガの関係をきちんと理解す

べきです。執着や欲望を伴ってなされる普通のカルマ（行い）は、束縛を生みます。一方、無欲で無私の行いは、カルマヨーガ〔行いによって神との合一を果たす行〕となります。私たちの生活は、ローガ（病気）ではなく、ヨーガ（神との親交）となるべきです。

今日、私たちの行いのほとんどは、五感の快樂と結びついているために、「ローガ」（病気）をもたらします。この病気からの解放は、霊的な道を歩むことによって手に入れることができます。霊的な道というのは、単にバジャンを歌ったり、讃歌を唱えたりすることではありません。これらは善い行いですが、完全に神への捧げものとして行われた行為だけが、霊的と見なされるのです。

真我について無知な状態にある人は、まだ咲いていない花のつぼみのようなものです。花が咲くと、花は周囲に香りを放ちます。それと同様に、自分の内にある神性を実感認識した人は、光と力の源となります。

寺社は思い出させるものとして役に立つのみである

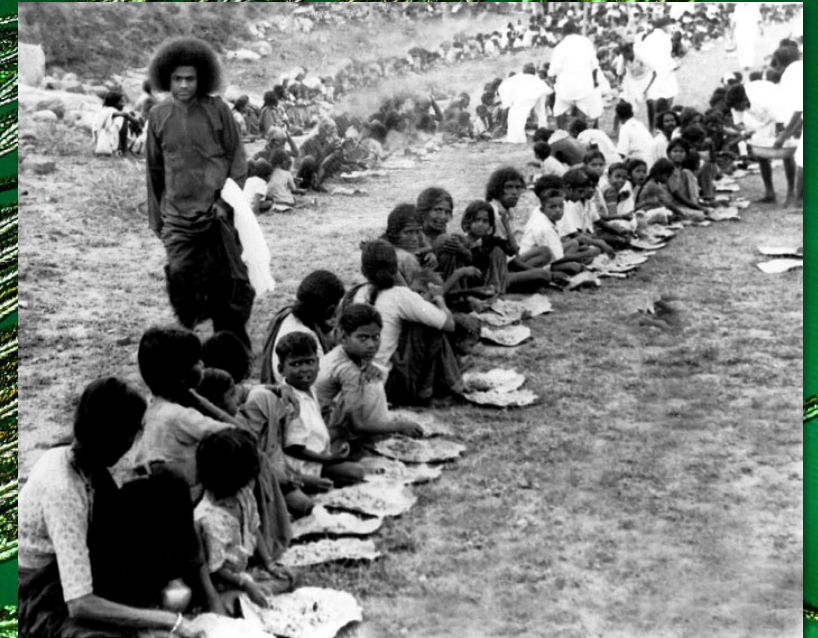
なぜ寺社を建てる必要があるのですか？ 理想は、あなたのハートを神が宿る神殿にすることです。しかし、これは誰にでもできることではありません。

石造りの神殿は、神の存在を思い起こさせるものです。弁護士に会うと、あなたは法的な問題を思い起こします。医者を見れば、自分の病気のことを考えます。それと同じように、寺社を見ると、あなたは神を思い出します。

寺社は、思い出させるものとして役に立つのみです。一方、真の礼拝は、それぞれの内にある神への心からの信愛から成るものです。ハートの神殿を清めるためには、あなたの人生を奉仕に捧げなければなりません。サティヤ サイ オーガニゼーションを他の霊性団体と区別するのは、サーダナ〔霊性修行〕の精神で行われるそうした献身的な奉仕です。老若男女を問わず、数え切れないほどのサイの帰依者たちが、サイへの愛により、さまざまな形で奉仕をしています。人々はスワミのヴィブーティ（聖なる灰）とスワミの奇跡について話します。しかし、本当の奇跡は、スワミの限りない愛です。この愛こそが、数え切れないほどの帰依者に、無私の奉仕に従事するよう促しているのです。

人生の浮き沈みは、私たちに教えを与えてくれる

この愛に優るものはありません。皆さんは、その愛によって私に引き寄せられているのです。愛を与え、愛を受け取る。これが私の取り引きです。この「取り引き」から得られる「所得」がどの程度のも



のであるかは、所得税担当者には分かりません。

私のアーナンダ（神聖な至福）には限りがありません。私は常に至福に浸っています。それは、私の至福は愛と結びついていて、他のどんな物とも結びついていないからです。もしあなたがこの道を歩むなら、あなたもこの、言葉では言い表すことのできないアーナンダを得ることができるでしょう。あなたはあらゆる種類の平安を実感認識することでしょう。



幸運と不運、幸せと悲しみ、失うことと得ることを、同じ心で見なさい。これらは、暑さと寒さ、夏と冬のように、自然の産物です。これらにはそれぞれ役目があるのです。それと同じように、人生の浮き沈みには、私たちへの教えがあるのです。実際、人生に反転がなければ、神性を経験することはできないでしょう。闇がなければ、光に価値を置くことはできません。困難を経験することなしに、利益を享受することはできません。心の平安がないからこそ、私たちは永続的な平安を実現するための方法を求めざるを得ないのです。ウパニシャッドは、「手放すことによつてのみ、不死を得ることができる」と宣言しています。永続的な平安と至福の秘訣を発見するために、人は「手放すこと」を身につけるべきです。

シュリ サティヤ サイ ババ述

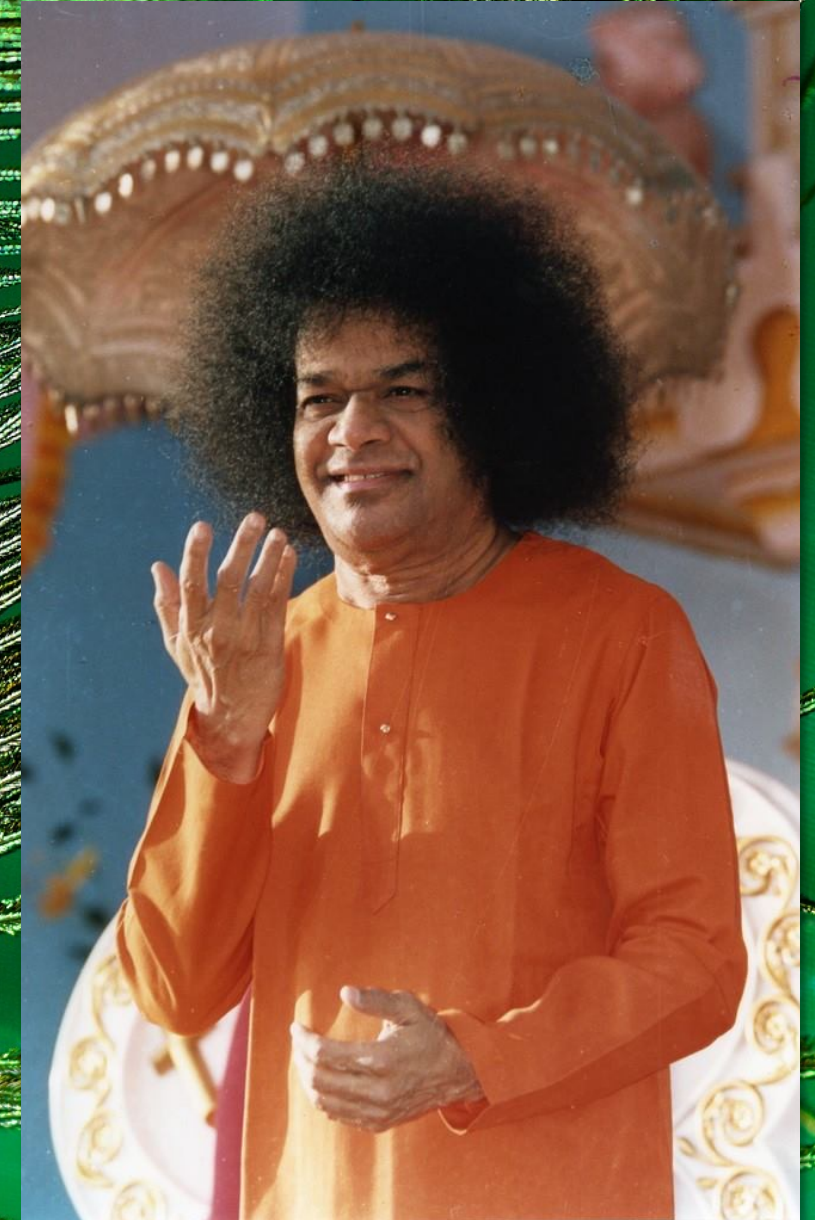
1983年4月6日

新マンディル

「サティヤサイ シャーンティ シュッダ」の落成式

グントゥール県にて

Sathya Sai Speaks Vol.16 C8





Om

BHAKTI NOTE

憶念と探究

究極の真理は一つ

LOVE ALL SERVE ALL
HELP EVER HURT NEVWR



Om

BHAKTI NOTE

憶念と探究

無私の愛は、
他者への奉仕として自らを現す。

LOVE ALL SERVE ALL
HELP EVER HURT NEVWR

シュリ サティヤ サイ ババ様 御生誕100周年記念ヴィジョン



ハートの中におられる神様を絶え間なく憶念し
人類同胞愛という一体性の花を捧げます



海と波のおはなし

SSSIOJ会長 住友正幹

霊性修行の目的は、突き詰めれば、「私」という個人性を手放すことであると言えるでしょう。なぜなら「私」という個人性は肉体としての私が作り出した幻想であり、その束縛から解放されることが解脱だと言えるからです。

それは、よく大きな海と波の關係に例えられます。海は、太平洋も大西洋もインド洋もすべてつながっており唯一のものです。その一つの海からたくさんの波が生じます。海から生じた波は、しばらく波として留まった後、再び海に戻りますが、波という姿をとっている間も、海と分離されて別の存在になったのではありません。波は、間違いなく海そのものであることは明白です。ところが、波は自分の姿を見て、自分は波に違いないと錯覚しています。また、他の波を見て、他の波は自分とは違う別の存在だと錯覚しています。それは自分たちが一つの海から生まれた海だということを忘れてしまったためでしょう。

霊性修行は、自分は波であるという幻想、つまり個人性を手放し、源である海に戻ることだと言えますが、海に戻るためにもがく必要はありません。私たちは今のままで海だからです。それを覆う、ただ

一つの障害物があるとすれば、それは自分自身でしょう。人は自分の想いに束縛されていると言えます。

自分は波だという想いに囚われると、そこに個性、個人性が生じ、消滅してしまわないかという恐れや、大いなる海と分離している感覚が生じます。

カリユガ（暗黒の時代）とよばれる現代社会の分断や対立は、人間が自分は限られた命である波だと錯覚し、すべては永遠につづく一つの海だという真実を見失ったことが原因です。

人は生まれる前、肉体はありませんでした。
人は生まれる前、性別はありませんでした。
人は生まれる前、名前はありませんでした。
人は生まれる前、家族はありませんでした。
人は生まれる前、国籍はありませんでした。
人は生まれる前、海でした。

人は生まれた後、肉体を持ちました。
人は生まれた後、性別を持ちました。
人は生まれた後、名前を持ちました。
人は生まれた後、家族を持ちました。
人は生まれた後、国籍を持ちました。
人は生まれた後、波になりました。

波は海が一時的に波という形をとった海に過ぎません。それを忘れると幻想の上に人生を築くことになり、世俗的にどんなに成功を取ったとしても、ど

んなに裕福で幸せな家族を持ったとしても、それらは時が来れば空しく消え去ります。

また、「富んでいる者が神の国に入るよりは、ラクダが針の穴を通る方がもっとやさしい」とイエス様が言われたように、この世の物や人への執着は霊性の道に躓かせることになります。

さて、波が海に戻れば、「私」という個人性は消えてしまうのでしょうか？

そうであれば、そのことに抵抗を覚える方がおられるかもしれませんが、その抵抗感は一アハムカーラ（肉体としての私）とアハム（真実の私）の混同からきているのかもしれませんが。波としての個人性（幻想）が消失しても海としての自己を失うことはあり得ません。つまり、私という意識は決してなくなるのです。それでも、抵抗を感じる方には、エドガー・ケイシーの次の言葉が参考になるかもしれません。

「Be yourself, yet one with All（自分自身でいなさい、あらゆるものとの一体性を保ちながら）」

この意識状態では、自分と他人という区別はもはやありません。ですので、分離感から生じる心配や恐れ、あるいは欲望からも解放されて真に自由なのでしょう。何かをしなければならぬという強迫観念もなく、すべてに満たされていて、すべてが愛おしいという境地でしょうか？



スワミご自身はアハム（海）とアハムカーラ（波）について次のように説明されています。

アハム（海）に関する御言葉

『私』の原理はあらゆる場所に存在しています。その原理は神自身と共に始まりました。最初の言葉はアハム（「私」）でした。プラナーヴァ〔プラナヴァ〕（「オーム」）でさえ、アハムの後に生じました。あらゆる創造の前に、アハムだけが存在していました。そのアハムは多になりました。普遍的なアハムと自分が「私」と見なすものの唯一性を悟る者のみが自らの真実を知っています。普遍的な「私」は、時間と状況のゆえに、さまざまな体のさまざまな名と姿をとって現れます。同一人物であっても、一生のうちに外観や人間関係に多くの変化を被ります。しかし、「私」は変わることなく留まります。それは俳優がさまざまな扮装をするようなものですが、俳優自身は同一人物です。

-1987年3月30日「I am I」（私は私）に関する御講話より

アハムカーラ（波）に関する御言葉

肉体は、水の中から沸き上がり、水の中で大きくなって消えていく水泡のようなものです。これが真理です。人間はブラフマンから生まれ、ブラフマンを通して成長し、ブラフマンに融合します。ブラフマンを通して成長し、ブラフマンに融合します。ブラフマンとは、ブラマ（迷妄）からの解放を意味します。ブラフマンを体験できないのは迷妄のせいだ

す。人間はアハムカーラ（自我、エゴ）とママカーラ（所有者意識）という迷妄に支配されているのです。
-1988年11月23日の御講話より

つまり、海はアハム（真我）であり波はアハムカーラ（幻想）なのです。私たち一人ひとは共通の海から生まれた波です。波に焦点をあてれば、分離感の中で苦しみが生れます。海に焦点をあてればすべての存在への一体性が生まれます。

どちらに焦点をあてても、私たちは海であるという実態は変わりません。しかし、どちらに焦点を当てるかで人生はまるで違ってきます。

海が自分は海であることを忘れて、波というドラマに没入すれば、波は行為者となり人生の喜怒哀楽に翻弄されますが、波が自分は海であり、波の役を演じているに過ぎないと知っていれば、その波の人生は海が演じるドラマになります。

スワミは「Life is a Game, Play it（人生はゲームです。演じなさい）」と言われますが、それはきっと、人生とは神が演じるドラマであり、波を演じている海として生きることで、人生はゲームのようになるという意味ではないかと思われま

スワミの御言葉

『ギター』は、結果に執着せず行為をなせと教えます。生きるそれぞれの立場に応じて、人には義務としてなすべき行為があります。それを、それにふさわしい精神で行うとき、行為をしつつ、しかも

束

束縛されることはありません。すべての行為を舞台劇の俳優が演ずるように、役割と自分自身を切り離して考え、自分自身をあまりにも役割に密着させぬように注意しなさい。すべては単なる芝居であり、至高神があなたに役割を与えたのです。このことをよく覚えておきなさい。自分に与えられた役割を見事にやりこなすこと、それであなたの義務は完了します。「かれ」が舞台劇の筋書きをかき、「かれ」がそれを楽しんで見えています。

アートマンは大洋であり、プラクリティ（物質）は広大で年代もなく無限の大洋のひとつの波です。人間は波のひとつとせずに過ぎないのです。あなたは大洋を、波を、捨てることはできません。ひとつとひとつという名と姿を捨てれば、大洋に融合することができます。海の深みに沈潜しなさい。なんと静けさでしょう。すべてが平安です。波立ち、騒音、混乱はなく、それらは外側の、海の表面にあるだけです。そのように、ハートのもっとも深いところ、そこには平安が貯蔵されています。あなたは深い奥底のハートをよりどころとせねばなりません。

-『黄金の宇宙卵』 1960年9月27日の御講話より

エドガー・ケイシー：

エドガー・ケイシーは米国が生んだ20世紀最高の霊覚者の一人であると言われます。ひとたび催眠状態に入ると、彼自身がまったく知らない様々な事柄について、卓越した情報を与えることができました。（エドガー・ケイシー口述『神の探求』より抜粋）

サッティヤム シヴァム スンダラム 5

第45回

バガヴァン・ババは、1976年、布林ダーヴァンのアシュラムから3キロ離れたホワイトフィールドに二番目の病院を設立なさいました。ネータージー〔指導者の意の敬称〕・スバスチャンドラ・ボース〔インド独立運動の偉人〕の盟友、シュリ・N・G・ガンプレイは、ドイツに30年間滞在した後インドに戻り、1969年にホワイトフィールドに落ち着きました。愛国心に促され、同じような志を持った医療スタッフたちの助けを借りて、彼は「ヘルス・アンド・エデュケーション・ソサエティー」という名前の小さなクリニックを始めました。約4万平方メートルの広大な土地にあるシェッド〔平屋の小屋〕の中に設置された約9平米のクリニックは、無料で村人たちに薬を調剤していました。1970年、健康増進という気高い大義をさらに推し進めるために、ガンプレイはその土地とクリニックを、シュリ・サティヤ・サイ・ヘルス・アンド・エデュケーショ

ン・トラストに委譲しました。

1976年8月28日、ヴィナーヤカ・チャトゥルティの吉祥な日、ホワイトフィールドのシュリ・サティヤ・サイ病院の落成式において、バガヴァン・ババはヘルスケアに関するご自身の構想について表明なさいました。

「人は、体の病と心（マインド）の病という二つの種類の病気に苦しんでいます。この二種類の病気に関して大切なことがあります。それは、どちらも美德を培うことによって癒されるということです。体の健康は心の健康に必要な条件であり、心の健康は体の健康を確実なものにします。体と心は密接に関わりあっています。健康な体は、健康な心の最良の入れ物です。

物質的な生活と霊的な生活は、天秤の二つの皿のようなものです。二つのバランスは、ある程度の霊的な進歩が得られるまでは、等しく保たれるように注意する必要があります。霊的な識見を培うことは、人に寛大さ、逆境における不屈の精神、善をなそうという熱意、そして、自分の能力を最大限に発揮して奉仕をするという精神を与えます。これらの美德は、心と体の両方を強くさせます」

ババから医師たちへのアドバイスは次のようなものでした。

「ここで働く医師の皆さんに指摘しておかなけれ

ばならないことがあります。医師が処方する薬以上に効果があるのは、医師が話す甘く優しい言葉であり、医師が示す愛と思いやりは、患者の病気をより効果的に速く治すことができるということです。医師は患者を自分の親類縁者と見なし、愛と常に変わらぬ配慮を持って患者に寄り添わなければなりません。医師は治療に影響を及ぼすということ、そして、病気が治ったら患者は医師に満足と喜びをもたらしてくれるのだから患者と医師は連携する必要があるということ、覚えておかなければなりません。ですから、医師は患者に感謝しなければなりません」

そして、ババは患者には次のアドバイスをなさいました。

「神の恩寵を頼みとするのは、どんな病気にも最高の治療薬です。薬に対して抱いている信心を神への信心に変えなさい。あなたの信頼を、薬ではなく神に置きなさい。私は、たくさんの人たちが錠剤や強壮剤に頼っていることに、大変驚いています。祈り、霊的な規律、瞑想という手段に訴えなさい。これらはあなた方に必要なビタミン剤であり、あなた方を回復させてくれるでしょう。神の恩寵なくして、薬や医師に何ができますか？ 神の御名ほど効き目のある薬はありません！」

バガヴァンは、ホワイトフィールドの病院を築き上げて管理するための自身の道具として、ラー

ジェーシュワリー医師をお選びになりました。学問的にも、彼女は産科婦人科の専門医として最適任者でした。さらに、彼女は自分の職業に対する情熱を持っている医師でした。彼女は一日12時間以上も仕事に費やしていました。神のことはそれなりに信愛していましたが、1972年に布林ダーヴァンでバガヴァン・ババに会うまでは、サードゥやサンニャースィン〔出家行者〕には、さほど尊敬の念は持っていませんでした。実際、ラージェーシュワリー医師が布林ダーヴァンへやって来たのは、シュリ・サティヤ・サイ・カレッジで学んでいる一人息子に会うため、たまたまその時、ババがそこに居合わせたのでした。

初めて布林ダーヴァンに来た時には、その後の出来事の予感などまったくなく、もちろん、自分が神の計画における最終目的地に到達したということには気がついていませんでした。その後も何度か布林ダーヴァンを訪れましたが、そのうちの一つの訪問の際、ババからホワイトフィールドの病院で働かないかと招かれた時でさえ、ラージェーシュワリー医師の答えは丁重な「ノー！」だったのです。49歳という年齢でガーナの都市クマシで450の病床を抱えるコンフォ・アノキエ総合病院の最高責任者として働いていたラージェーシュワリー医師は、キャリアの全盛期にありました。当然ながら、約9平米の広さしかないクリニックを引き受けるなど、

彼女にとって面白いことではありませんでした！ラージェーシュワリー医師は、より良い将来を求めてガーナから英国へと移る計画をまとめようとしていたところでした。彼女の「ノー」に対するババの返答は、すべてをご存知の優しい微笑みでした！もちろん、ババはすでに彼女のハートの中に入り込んでいて、彼女のハートは自分では気づかないうちに、本当の故郷を求めています。

ババは、前回のシルディでのアヴァター時代に、よくこうおっしゃっていました。

「たとえ私の帰依者がどんなに遠くにいようと、何千マイルも離れていようとも、私のもとへ来るようにと私が望めば、その帰依者は足に糸を結びつけられた雀のように引き戻されてくるでしょう！」

それはまさしく、定めの際にラージェーシュワリー医師に起こったことでした。彼女はホワイトフィールドの病院が落成する数か月前に布林ダーヴァンへやって来て、定住したのです。ラージェーシュワリー医師は心底、仕事に没頭しました。それは彼女が知っている唯一のやり方でした。新しい持ち場で、彼女は病院を築き上げるための才量を存分に発揮しました。彼女は、好んでチャレンジを引き受けるリーダーであり、ファイターでした。彼女は行く手を阻む障害を乗り越えることを楽しみました。バガヴァンの恩寵と指示の下、彼女は、医師、そし

て、病院へ押し寄せる地方の村人たちのために働く職員から成る、専任チームを立ち上げました。

病院経営におけるささいな事柄への彼女の気配りは、賞賛に値する見事なものでした。彼女にとっては、清潔さが第一で、次が信心深さでした！ラージェーシュワリー医師はよく、掃除人たちが来る前の早朝に、ほうきを手に病院の敷地を掃除していました。彼女はこよなく愛する同僚たちにこう言っていました。

「ある種の仕事をほめそやして、別の仕事を卑しいと決めつけるのは無意味です。シーツを洗うことと外科医がナイフで腕を振るうことは等しく神聖で、やりがいのあることです。どんな仕事であっても、バガヴァンへの捧げものとして行うなら、その行為者はカルマ ヨーギ〔行いを通して神との合一を得る行者〕という気高い位にまで高められ、神の恩寵はまさに命を支える呼吸となるのです。神の全知を信じ、自分は行為者であるという主張と自分の行為の報いへの期待を手放すことは、神と一つになるという究極の目標だけでなく、永続的な神の臨在という豊かな喜びも約束してくれるのです」

実際、ラージェーシュワリー医師は、永続的な神の臨在を物理的にも体験していた、ずば抜けたカルマ・ヨーギでした。

それは、1980年11月9日、日曜の朝の極めて早い

時間に起こりました。バガヴァンはプラシャーンティ・ニラヤムにおられました。ブリンダーヴァンの大学で働いていた彼女の息子は、土曜日の午後に始まった24時間のグローバル・アカンダ・バジャンに参加するために学生たちと一緒にプラシャーンティ・ニラヤムに行っていました。ラージェーシュワリーはアシュラムの自宅に一人でいました。いつものように、彼女は午前3時に起床して沐浴をした後、4時ごろに日課の礼拝を始めました。

プージャー〔供養礼拝〕の半ばに、誰かが大きな声で「ドクター・アンマ！ ドクター・アンマ！」〔アンマは母の意〕と彼女を呼ぶのが聞こえました。ラージェーシュワリーは、病院での看護を必要とするような緊急事態が起きたに違いないと推測しました。再度、「ドクター・アンマ！ ドクター・アンマ！」という同じ声が聞こえました。誰だろうと窓の外をのぞいてみましたが、遠くて暗かったのでよく見えませんでした。三度目に声がした時、彼女は外へ歩いて行って、正面玄関のドアを開けました。彼女の心は歓喜の衝撃波を受けました。生身のバガヴァンがドアの外に立っておられたのです！ 彼女は言葉を失い、その神聖な時間帯〔ブラフマ・ムフルタ。日の出から翌日の日の出までを30等分した29番目の刻。だいたい午前3時から6時あるいは5時の間〕に突然神様が自分の家の戸口に姿を現されるといふ予想外の出来事への畏怖の念に打たれました。

バガヴァンは沈黙を破り、

「プージャーをしていたのですか？」

と、歌うような美しい声で尋ねられました。

ラージェーシュワリーがパーダナマスカール〔御足への礼拝〕をしようとして身を屈めると、ババがおっしゃいました。

「しなさい、ナマスカールをしなさい！」

ナマスカールをした後、彼女はあまりの喜びで一瞬目を閉じ、それから、感謝の気持ちいっぱい「スワミ！」と言って目を開けました。再び目を開けた時、ババは消えていました！

ラージェーシュワリーが応接室を通過してプージャーの部屋に戻る時、鏡に自分の姿が映っているのが見えました。顔からヴィブーティが噴き出していました！

その朝、プラシャーンティ・ニラヤムではアカンダ・バジャンが行われていたので、彼女の息子はマンディルのベランダに座っていました。午前6時半ごろ、ババは彼を室内に呼び入れられました。ババは光り輝く顔に子供のような微笑みを浮かべておっしゃいました。

「私はブリンダーヴァンへ行って、あなたのお母さんに会いましたよ！」

ラージェーシュワリーは、奇跡的な治癒や救助活動といった形をとった、さらに多くの神の恩寵の驚異を病院で目撃しました。しかし、その全ての中で

一番驚異的だったのは、才気あふれる医療専門家たちを引き付け、変容させ、神の使命における優れた治療の道具へと変えてしまうバガヴァンの名人芸でした。そのうち何人かはプラシャーンティ・ニラヤムかホワイトフィールドのババの病院に常勤の内科医や外科医として加わり、他の多くは客員医師として奉仕を捧げました。彼らの話はもちろん、この章で彼らの名前を挙げ連ねることさえ、とうてい不可能です。その中でも、ホワイトフィールドの病院でのP・V・ヘッジ医師、バラスツブラマニアン医師、ナラサツパ医師、サロージャンマ医師、プラバ医師の献身的な働きぶりは注目に値します。1983年に加わったサーヴィトリ医師は、私心のない、疲れを知らない奉仕において群を抜いています。一人ひとりの人生のすばらしい英雄伝をつづるには、丸々一冊を要することでしょう。彼らの仲間が増えますように！

ホワイトフィールドの病院は、すでに産科病院として認知と名声を獲得していましたが、さらにプライマリー・ヘルスケアにおけるほとんどすべての設備を備えた無類の治療センターとなるべく、着実に成長してきました。1980年11月の手術室の開設と総合外科治療の開始は、その発展において重要な画期的な出来事となりました。

現代において医学という気高い職業に目標を定めたのは、かのウイリアム・オスラー医師ですが、彼

は「病気を予防すること、苦しみを和らげること、病人を治すこと、これが我々の仕事である」と宣言しています。

ガレノス〔古代ローマの医学者〕は、「私が薬を与え、神が癒す」と世間に表明して、治療という仕事に最も効能のある方法を示しました。商売が医療の分野を侵略し、医療の目標と方法が歪められ、医療がますます多くの人々にとって、ますます手に入りにくいものとなりつつある社会において、門をくぐるすべての人に質の高い医療を完全に無料で提供している、ババの設立されたプラシャーンティ・ニラヤムとホワイトフィールドの病院は、あらゆる医療専門家にこの職業の気高さと栄光を思い出させる標識灯として光り輝いています。



ホワイトフィールドの病院の落成式で
ヴェーダの祈りを詠唱するシュリ・カマヴァダニ



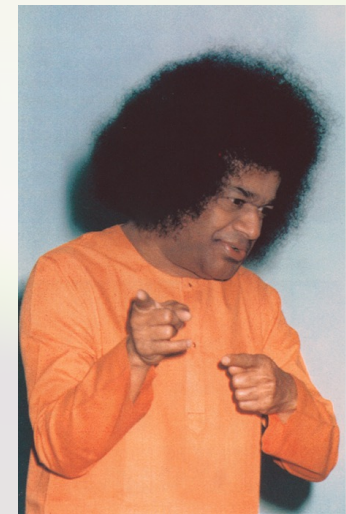
ホワイトフィールドの
シュリ・サティヤ・サイ総合病院



ラージェーシュワリー医師を祝福するバガヴァン



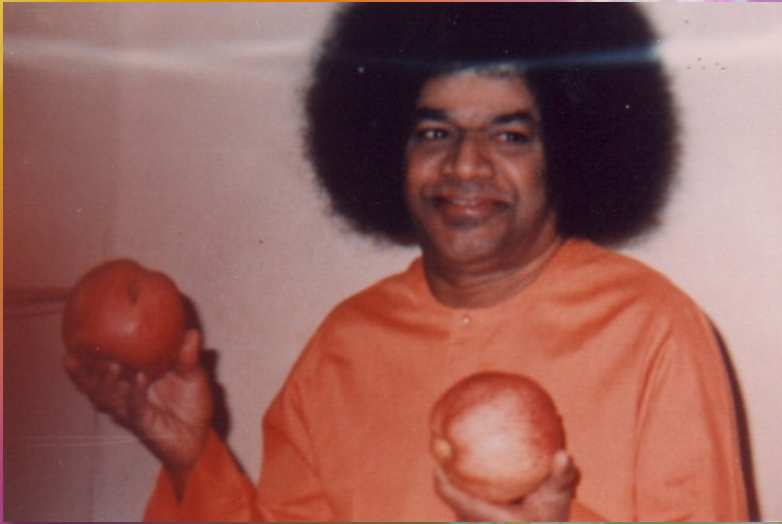
ホワイトフィールドの病院の医師たちと共に



「私はここにも、そこにもいることができます！」

サイと共に

1998年7月20日の会話



スワミ： (学生たちに)

まだ、あまり雨が降っていませんね。

(ある教師に)

一日一個のリンゴは医者を選ばせる〔西洋のことわざ〕。患者は他の果物を食べてはいけません。スイカでさえ糖分が4%ありますが、リンゴは3%だけです。リンゴが糖尿病を悪化させることはありません。リンゴはビタミンやミネラルを与えてくれます。糖尿病患者には、スプーン2杯のVIVAパウダー〔カルシウム、リン、ビタミンA、葉酸、鉄、ビタミンC、ナイアシン、ビタミンD、B1、B2、B6、B12、が含まれている市販の健康飲料〕をお湯に溶かして飲むほうが、牛乳に入れて飲むよりもよいでしょう。お米が良い理由はデンプン質が血液に取り入れられるのが速いからです。一方、レーギ〔シコクビエ〕や小麦の場合は3時間程度かかります。南インドの人はお米を食べる人たちで、北インドの人は小麦を食べる人たちです。

教師： スワミ、どうか学生たちに話をしてください。

スワミ： 「アクシャラ」〔不滅なるもの〕の意味は何ですか？

教師： 単語、文字・・・

スワミ： いいえ。「ア」は「アートマ」〔真我〕を意味し、「クシャラ」は「デーハ」〔体〕のことです。ですから、「アクシャラ」は「アートマと体の結合体」を意味します。それは多様性の中の単一性です。「スワダルマ」〔自己のダルマ〕と「パラダルマ」〔他者のダルマ〕とは何ですか？

教師： 「パラダルマ」は、世俗的な義務という意味です。

スワミ： 「スワ+ダルマ」〔自己+ダルマ〕とは、自分の良心に耳を傾けることです。スワダルマ〔自己のダルマ〕を果たすと、パラダルマ〔他者のダルマ〕の面倒もみることができます。同様に、「スウェーッチャー」〔自由/自由意志〕とは、「アートマに関連するもの」という意味です。外での自由とは、自転車やスクーターで移動することです。そのような自由は、耳が聞こえない人、口が利けない人〔のようなもの〕です。「スウェーッチャー」〔自由/自由意志〕とは、あちこちに行って、心に思いついたことを何でもする自由ということではありません。わかりましたか？ これらのことを

学生たちに明確にするようにしなさい。

学生： スワミ、どうか来て、学生に話をしてください。

スワミ： しかし、学生たちはそれを要求してはいません。

教師： スワミ、学生たちは善良です。彼らはスワミのことをもっともっと知りたいと思っています。

スワミ： スワミにInterest〔興味／インタレスト〕はありますが、それは「Into-Rest」〔休憩に入ること／イントゥーレスト〕であって、「In-Trust」〔信頼していること／委ねていること／イントラスト〕ではありません。「In-trust」であるべきです。8月10日に副学長が交代します。新しい副学長は8日にやって来ます。

（退任する副学長は著名な物理学者であるG.ヴェーンカタラーマン博士で、次期副学長はインド政府の元首席警視総監であるS.V.ギリ氏）

教師： スワミはいつも誰をも迎え入れ、さよならはおっしゃいません。

スワミ： そうです。しかし、私たちは習慣に従って役目を果たさなければなりません。副学長〔G.ヴェーンカタラーマン博士〕は優秀な科学者です。彼には管理部門での任務が与えられるでしょう。

教師： はい、スワミ。私たち一人ひとりの面倒を見てくださるスワミは、とてもすばらしいです。

スワミ： どこで行事を行うべきですか？ ここで、それとも大学で？

教師： スワミが提案なさる場所であればどちらでも。

スワミ： これは純粋に大学の行事です。ですから、大学で開催しましょう。

教師： スワミ、ブリンダーヴァンとアナンタプルの学生も呼ばれるのですか？

スワミ： いいえ。プラシャーンティ・ニラヤム・キャンパスの学生と小中高の男子生徒だけです。

教師： スワミ。スワミ、去年、学生たちはバガ

ヴァンとの質疑応答に参加する機会が与えられました。どうか今年も同じことを許可してください。

スワミ： しかし、男子学生たちがそれに興味を持っているべきではありませんか？ リエンジニアリングはどうですか？

教師： はい、スワミ。コダイカナルでスワミがリエンジニアリングについての講話をされたと聞きました。

スワミ： いいえ。男子たちがディベートをして、彼らはディベートからチベットに行きました！（笑顔で）

教師： スワミ、もしスワミがリエンジニアリングについて話して下さったらよいのですが。

スワミ： 考えてみます。
（学生たちに）

MBA〔経営学修士課程〕の学生たちはどうしていますか？ 科目はきちんと教えられていますか？

（ある教師に）

私の意見では、マーケティングやファイナンス、銀行業務、国際ファイナンスといった

重要な科目について、特別なインプットを与えるべきです。

(スワミは、インドルピーが米ドルや英ポンドに対してどのように変動しているかを説明なされた)

教師： はい、スワミはそのことを4年前に話されていました。

スワミ： そうです。銀行業務、ファイナンスはすべての面で重要です。8月以降、財務状況は改善されるでしょう。

教師： スワミ、〔ババの〕75歳の御誕生日の後、私たちの国に改善はあるのでしょうか？

スワミ： 知っていますか、今月末には、ロンドンから500人の若者がスワミと一緒にいようとここにやって来て、劇の発表をします。

教師： 75歳の誕生日までに、全世界がスワミのことを知るようになるでしょう。

スワミ： しかし、私はそんなことは望んでいません。

教師： でも、スワミ、私たちはあなたが必要で

す。スワミの恩寵があれば、すべてが可能です。現在、世界の状況はとても悪いのです。人類はそれほど堕落してしまったのでしょうか？

スワミ： いいえ、人類ではなく、人間が堕落しているのです。人類は堕落しません。人類とは何ですか？ 人間とは何ですか？

教師： 人間の真の研究対象は人間です。〔ババがよくおっしゃる英国の詩人アレキサンダー・ポープの言葉〕それは、思考と言葉と行いの一致です。

スワミ： いいえ。答えは、質問それ自体の中にあります。Man (人間/マン) のKindness (優しさ/カインドネス) がMankind (人類/マンカインド) です。人はハートの中に思いやりを持つべきです。

Students With Sai: Conversations 1991 to 2000
pp.230-232より



ワカ チンナ カタ

グルへの忠誠心

古代のインドにガウタマという聖仙がいました。ガウタマには、彼のもとで学ぶ大勢の弟子たちがいました。ある日、ガウタマはすべての弟子を呼んで、言いました。

「私の可愛い子供たちよ！ おまえたちも知ってのとおり、この地域一帯は深刻な干ばつに見舞われて一向によく兆しがない。私は草庵の牛たちが気がかりでならない。牛たちはすでに、とても痩せて弱ってしまっている。これらのもの言えぬ生き物たちが苦しんでいる姿は見るに忍びない。牛たちを広大な牧草地とたくさん水がある、遠い場所へ連れて行かねばならないと思うのだ。おまえたちの中の誰か一人がこの仕事を引き受けてくれれば、私はとても嬉しい。この災害が収まれば、また牛たちを連れて戻ってくればよいだろう」

多くの弟子たちは、師に自分の本当の気持ちを悟られないよう、ただ下を向くばかりでした。師の視線を避けるために、他の者の陰にかくれる弟子もいました。

サティヤカーマ〔「真理を愛する者」の意〕という名の一人の弟子が立ち上がり、師にうやうやしく頭を下げて言いました。「先生、私が牛たちを引き受けましょう。ご心配には及びません」。多くの弟子は、彼がそのような危険な仕事をするのを思い

留ませようとした。弟子たちは忠告しました。「ああ！ 君は快適な草庵の生活から遠く離れて、荒野でたった一人きりになるのだよ。きちんとした食べ物さえ見つからないかもしれない」。サティヤカーマは答えました。「愛しい友人諸君、僕たちの先生が幸運を祈ってくださるのだから、きっと僕は十分な安全と食べ物に恵まれると確信している。それに、牛たちが一緒にいてくれるから、僕は一人きりにはならないよ」

ガウタマは、大勢の弟子たちの中の一人だけでも、師への奉仕としてその仕事を引き受けてくれる者がいたことを喜びました。ガウタマはサティヤカーマを祝福して言いました。

「400頭の牛を連れて行きなさい。牛が全部で千頭に増えたら戻ってくるのだよ」

サティヤカーマは牛たちを従え、うっとりするような美しい谷にたどり着きました。毎日、彼は朝早く起きて沐浴で体を清め、太陽神にひれ伏して礼拝し、祈りの言葉を唱えました。牛たちの世話をしている時は、歩いている時も座っている時も、常に神の御名を唱えたものでした。サティヤカーマは愛情を込めて牛たちの世話をしました。『ゴー・セヴァ』（牛への奉仕）を『グル・セヴァ』（師への奉仕）だと思っていたからです。サティヤカーマは、

決して孤独な生活の中で思い悩んだり、不安になったりしませんでした。牛の数を数えることも気に留めていませんでした。

ある日、朝の儀式が終わった後、サティヤカーマが木の下に座っていると、神々の長（おさ）であるインドラ神が目の前に現れて、こう言いました。「私の可愛い息子よ！ 牛の群れが全部で千頭になったことに気づかなかったのかね？ もうそなたは師の草庵に戻ることができるのだよ。私が一緒について行ってあげよう。さあ、出発だ」

サティヤカーマはインドラにひれ伏して、草庵に戻る時が来たことをインドラが教えてくれたことに感謝しました。サティヤカーマとインドラは、4つの夜を4つの異なる場所で過ごさなければなりません。毎朝、サティヤカーマは1つのヴェーダの真髓を教わりました。こうして、彼は師の草庵にたどり着くまでに4つのヴェーダのすべてを修得しました。ヴェーダの知識によって啓発されたおかげで、サティヤカーマの顔には不思議な光輝が放たれました。それは、彼が天上の主〔インドラ〕の祝福を受けた証拠でした。サティヤカーマが悟りを開いたのを見届けると、インドラ神はその若者に恩寵を降り注いで、姿を消してしまいました。

サティヤカーマは、千頭の牛を連れてグルの草庵

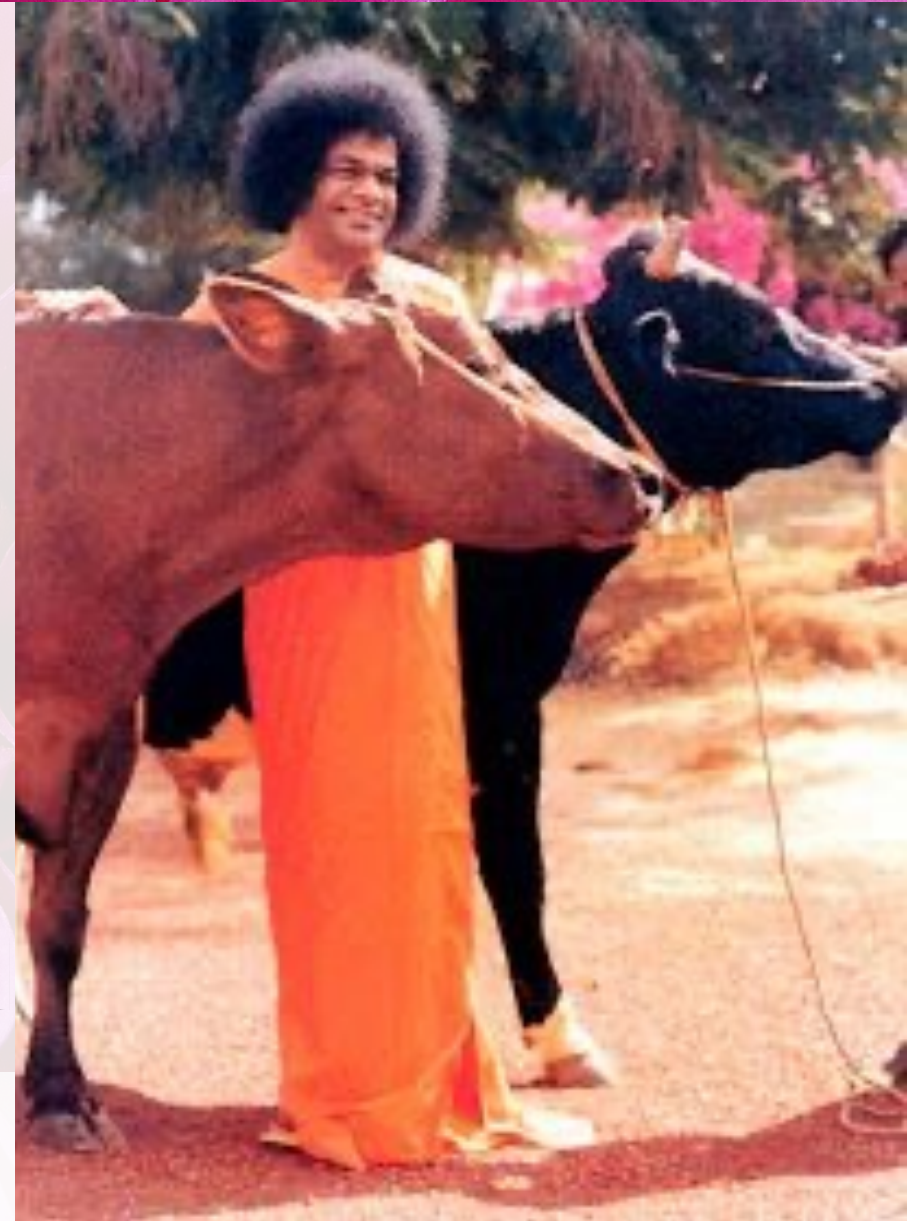
に戻りました。彼はグルと仲間たちから熱烈な歓迎を受けました。サティヤカーマが師の足もとにひざまずくと、ガウタマ仙は彼を抱きしめて言いました。

「わかっている。おまえは今や4つのヴェーダを修得した偉大な学者だ。わが息子よ、おまえはそれを受けるに値する」

サティヤカーマは、ただ自分のグル〔師〕に対する愛と忠誠心ゆえに、天上の主であるインドラ神を喜ばせることができたのでした。



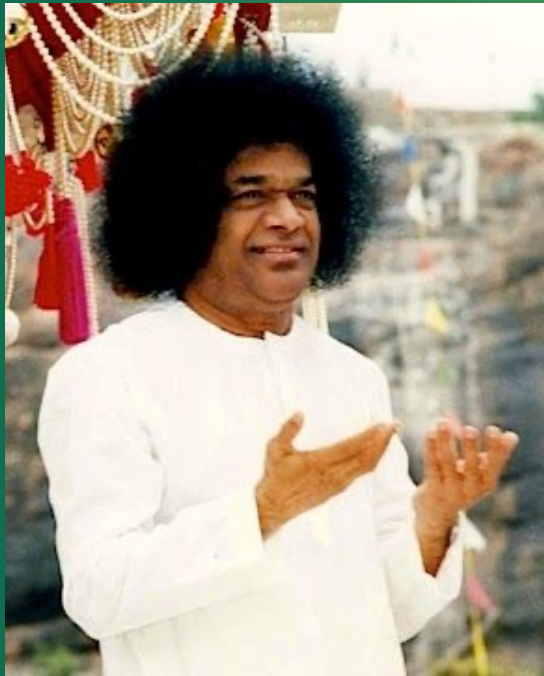
『ワカ チンナ カタ』とは「ある小話」という意味のテルグ語で、ババ様が御講話の中で話された、たとえ話や物語です。





<活動報告 1>

多摩グループ17周年記念祭



オーム シュリ サイ ラム
シュリ サイ・ババ様の蓮華の御足に捧げます。

令和4年10月6日(日)秋の空が晴れ渡る日に多摩地域郊外の市民センター和室にてSSOIJ(サティヤ・サイ・インターナショナル・オーガニゼーション・ジャパン)多摩グループ17周年祭が行われました。

今回はオンラインでお祝いするか、リアルでの活動にするか、検討するところから始めました。というのは3年程オンラインで活動を行っている間に、市民センターの予約の仕方がコロナ対応込みで変わっていたり施設スタッフも入れ替わっていたり、マスク着用が義務だったり、また新たに始めるような形に感じられたからです。会場には人数制限もなくなり飲食可能ということで一時期よりは通常に使えるようになっていました。ちょうどそれぞれのサイグループ・センターの判断で活動を始めて良いとのことだったので、いろいろ考慮した上で段階的に、まずは少人数でリアル活動にて行うことにしました。

プログラムですが、スワミ※1は自国の文化を大事にするようにおっしゃっておられます。もう何年も前ですがサイユース活動でお正月に書道やお餅つきを行ったことがありました。

最近ご縁ができたこともあり、前半のプログラムは初めての企画で、『彩茶会(サイ茶会)』として茶道を通して日本文化を学んでみました。

最初にワークショップ形式で、「茶道は禅を中心に儒教・老荘思想・禅宗建築・華道・書道・着物・日本の各地域の陶器などあらゆる教養や文化と結びついています。また、もとは禅宗からきていますので人間的教養を大切に、サイ・ババ様のおっしゃる五大価値にとってもつながるものが感じられます」といった内容のお話をしました。

続いて実践です。市民センターの和室が茶室になっており、電気式ですが炉が切っておりますので本式に近い形で行えますが、参加者はみな初心者ですのでお稽古のお茶会の形で行いました。

まずは先生がお茶をてて一服いただきます。お菓子は先生の手作りの栗の形を模した栗きんとんです。続いて、私たちもお茶を点ててみます。お茶を点てる前にもいろいろな所作があり、一つずつ先生に教わります。実は今回のお茶会前にさんというお茶を運ぶ役の練習なども少々行っておいのですが、本番になると手順通りに動けなくてこちら練習しながら学んでいきました。一通りメンバーにもお茶を点ていただき、「そろそろおしまいにしましょうか」と話していると、バジャンから参加予定だったメンバーが間に合っ

その日参加のメンバー全員でお茶室に揃いました。最後にお茶を点てた時に、みなの時が止まるような、とても静まる時間がありました。

続いてはSSIOJ副会長のBro. Oのスタディーサークルで、『ラブ オール サブ オール (すべてを愛し、すべてに仕えなさい)』をテーマで行いました。感覚的に神(愛)を感じたことがある、論理的思考での神についての見解、これから自分が行っていく役割など、メンバーそれぞれのお話をとおして最後には見事にみなエネルギーが循環するようなスタディーサークルでした。

バジヤンはUご夫妻が楽器を持参してくださり大変助かりました。久方ぶりに地元地域にてサットサング(善人との親交)で行われたバジヤンで、歌は波動としてエネルギーで満たされ、伝わっていくのが感じられました。

バジヤン後にみなさんに一言ずついただき、その後持参したお料理での食事会で久方ぶりにみなさまとゆっくりできました。Bro. Oもおっしゃっていたのですが、その後3日ほど頭が活性化するような感じでした。ババ様を通じてサットサングのみなさまと交流できましたこと、今年も無事、周年祭が迎えられましたこと、深く感謝申し上げます。

オーム サイ ラム
多摩グループ一同



※1スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。 参考文献：「一億人の茶道教養講座」岡本浩一（淡交新書）。



<活動報告 2>

福岡グループ28周年記念祭



前回、前々回まではコロナ禍のため記念祭はオンラインでの開催でしたが、10月23日(日)ようやく、28回目となる福岡グループ記念祭を通常開催することができました。ただ自粛解除とはいえ未だ感染が収まっていないことを考慮して、ゲストや地域グループにはお声がけせず、福岡グループだけで定例会と同じ時間で行いましょうということでもとまりました。

それでもスワミ※1に感謝せずにいられないことは、インドからの留学生のBro. Sさん、千葉から福岡へ移住されてきたSis. Mさんという新たな仲間にも恵まれたおかげで、再開にふさわしい新鮮な気持ちで記念祭を迎えることができたことです。

記念祭はガネーシャバジャンに始まり、オーム三唱、108の御名、挨拶をはさんでヴェーダ吟唱、そして会員スピーチへと進みました。今年はSis. Mさんにスワミとの出会いと御教えを生きるきっかけとなったエピソードを語っていただきました。簡単にご紹介します。

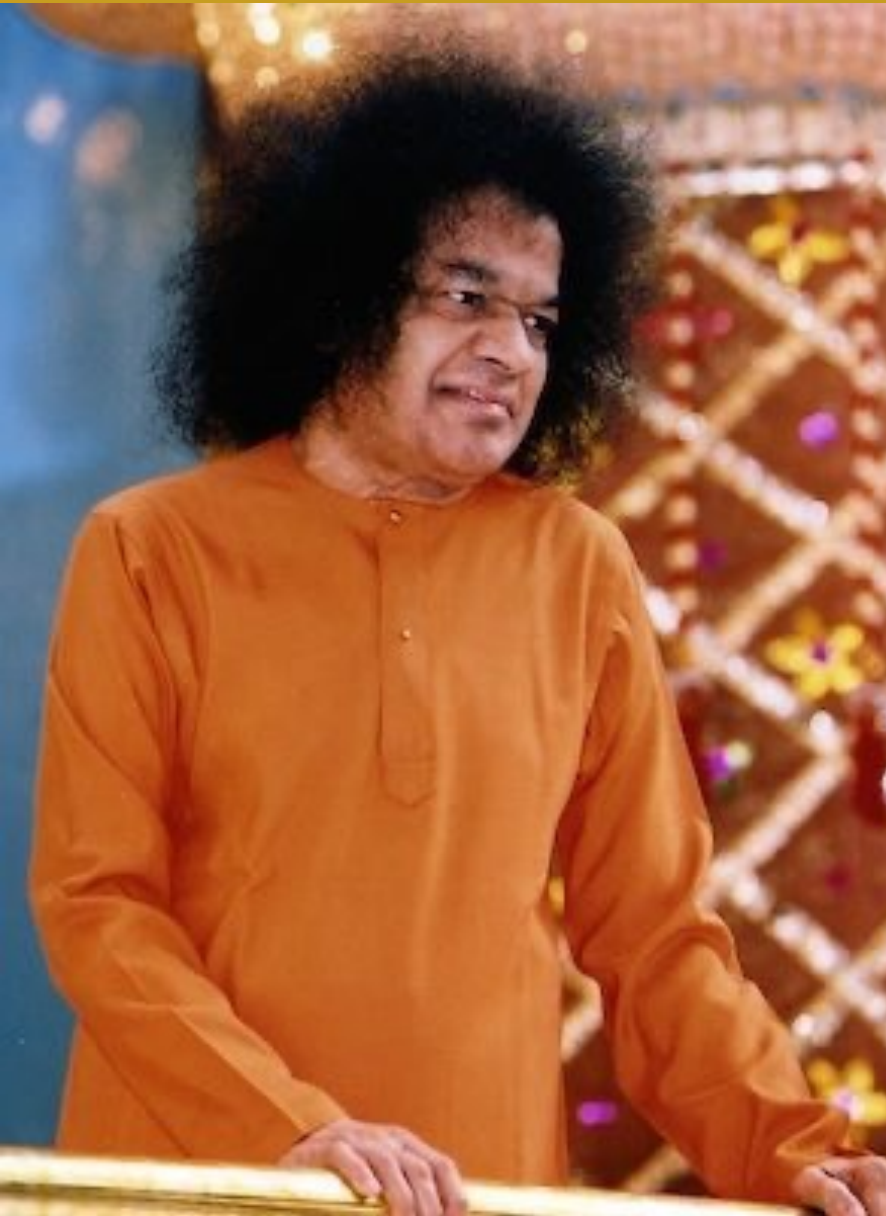
Mさんは仕事や人間関係のストレスで疲れ果て、どこかの海でのんびり癒されるつもりで2003年1月に南インドへの旅に出ます。ところが夜間、空港から宿へと向かうために乗り込んだタクシー運転手との会話をきっかけに、まったくプランに

なかったプッタパルティ※2へと向かいます。

そして初めてのダルシャン(聖者や神を拝見すること)を経験し、疑いや疑問を持ちつつもアシュラム(修行場)の滞在は居心地が良く、出会う人々からサイ・ババのことや体験談を聞いているうちに心を動かされ、サイ・ババをただ見るだけの3日間の滞在が1ヶ月、2ヶ月と延長し結局旅をすることなくマハー・シヴァラートリ※3を迎えます。

そして幸運にも何世代ものカルマ(行為の結果)が解消されるという金のリングム※4をみることもできました。しかしその体験を堺に、自身で認識できるほどの勢いで意識が変わり、心が開き始めると同時に閉じ込めていたネガティブな感情、トラウマ、痛み、怒り、不安が次々と出てきて苦しむことになります。

ダルシャン中、スワミに何度も苦しみの理由を心で問いかけても答えは見つからず、混乱状態が続く信じることがまた疑いへと変わり始めていた日にそれは起こりました。部屋に戻ると自分ベッドの上に一枚の紙が置かれていてそれは「私に全託しなさい」というメッセージで始まるある帰依者にスワミが送った手紙のコピーでした。「なぜ動揺するのですか?あなたは心配事をすべて私に任せなさい・・・」読み進めるとともに涙



が溢れ、そしてそれが問いかけに対するスワミの答えだと理解します。そのスワミの計り知れない愛で満たされた経験を機に全ての疑いが消え去り、全てをスワミに託し真実の道を生きようという決意が生まれたというお話をいただきました。

この体験談から私達グループの心も温まり、全託の大切さを再認識したところで愛をこめてディョーナショナルソングを歌い、『至高の平安 プラシャンティ・ヴァヒニ』のスタディーサークルです。これは英語版のPDFが公開されているおかげで留学生のBro. Sも交えた充実したディスカッションになりました。

そして最後はバジャンで28回目の記念祭を締めくくりました。定例活動もままならない日々が続き、今もまだ不安定ではありますが、仲間も増えこのように活動もできています。福岡グループはスワミにすべてを託し、心配ごとや出遭う困難にとらわれずこれからも力強く歩んでいきます。

神よ、あなたのご意思のままに。あなたのなさるままに。

ジェイ サイ ラム

※1 スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。

※2 プッタパルティ：スワミの生誕地であり本拠地である町の名前。

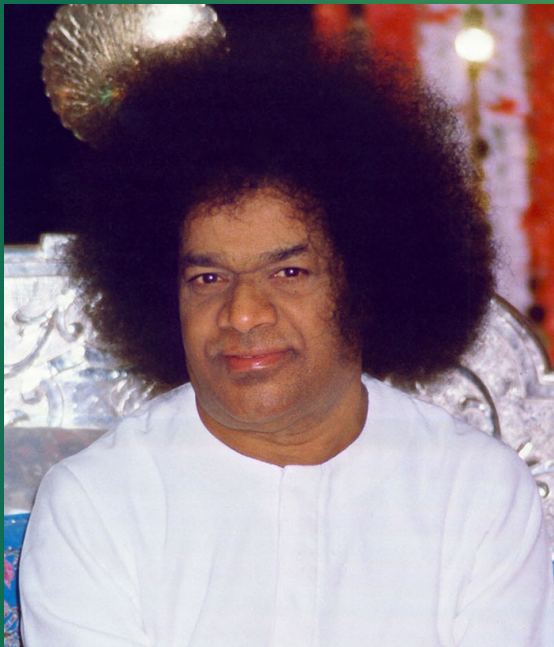
※3 マハー・シヴァラートリ：一年で月が一番細くなるパールグナ月黒分（満月の翌日から始まる新しい一ヶ月の前半）十四日の夜に行われる大シヴァ神祭。シヴァ神は破壊を司る神。

※4 リンガム：細長い球体でシヴァ神を象徴する。スワミはマハー・シヴァラートリ祭の最中に、体内でリンガムを物質化して口から出す。公衆の前で出すときもあれば、人の目に触れずに出すときもある。このリンガムはヒランニャガルバ（黄金の宇宙卵）とも称される。



<活動報告 3>

ナヴァラートリ2022



ナヴァラートリは、九つの夜という意味でドゥルガー・ラクシュミー・サラスワティーの三女神を3日ずつ礼拝するお祭りです。10日目のヴィジャヤダシャミー（勝利の10日目）と合わせてダシャラーとも呼ばれ、悪に対する善の勝利を象徴し、ドゥルガー女神が悪神マヒシャースラを倒したこと、ラーマ※1がラーヴァナ※2を倒したことが祝われます。プラシャーンティ・ニラヤム※3ではヴェーダ・ヤグニヤ（供儀）・女神礼拝・聖典朗読・奉仕・霊性学習など、あらゆる分野に渡るプログラムが行われています。

2021年はSSSIOJ（シュリ サティヤ サイ インターナショナル オーガニゼーション ジャパン）の行事として各センターグループ・チームがそれぞれに捧げ物を企画して動画を作成し、YouTubeを使用して映像を10日間公開しました。本年度はヴェーダチームの特別プログラムとして実施することとなり、オンラインアプリ『ZOOM』を使用して開催しました。テーマは11月に開催される今年の御降誕祭のテーマと共通としました。

テーマ：

神聖なる母 シュリ サティヤ サイ
DIVINE MOTHER SRI SATHYA SAI

◇日時

9月26日～10月5日 10日間

第一部：ヴェーダチャンティング

20：20～21：00

第二部：特別プログラム

21：00～22：00

◇第一部：ヴェーダチャンティング

10日間で唱えたマントラは以下の通りです。

- ・ガナパティ プラールタナー
- ・ナマカム
- ・チャマカム
- ・バーギヤ スークタム
- ・ドゥルガー スークタム
- ・マントラ プシバム
- ・サルヴァ デーヴァター ガーヤットリー
- ・ナカルマナー
- ・ニーラー スークタム
- ・ドゥールヴァー スークタム
- ・シリー スークタム
- ・メーダー スークタム
- ・ラグンニャーサハ
- ・ガナパティ プラールタナー ガナパータハ
- ・サラッスワティー プラールタナー ガナパータハ
- ・クリミナーシャカ マントラム
- ・プルシャ スークタム

- ・ラグンニャーサハ
- ・スワスティ ヴァーチャカ シローカ

マントラ チェックを完了した20名の方々が各マントラ（ルッドラムは各章）を一人でリードしました。

◇第二部：特別プログラム

～女神のガーヤトリーマントラのチャンティング練習

ナヴァラートリ期間は3日ごとにドゥルガー女神、ラクシュミー女神、サラスワティー女神を礼拝する期間となるため、それぞれの女神様のガーヤトリーマントラを練習しました。

ガーヤトリーマントラはヴェーダの真髄とみなされており、人を一切の心配と罪から解放します。ガーヤトリーマントラという名前は、このマントラがガーヤトリーという名の韻律（チャンダ）で書かれていることに由来します。この韻律は8音節×3行、計24音節より成り、特に神聖な韻律であるとみなされています。個々のヴェーダの神ごとに、その神を讃えて唱えるガーヤトリーマントラが存在します。

～スピーチ

ヴェーダチームのメンバー8名の方が毎日スピー

チを捧げました。ナヴァラートリ、ラーマーヤナ ※4、女神様、ヴェーダについてなど、様々な体験談とスワミ ※5 との対話をシェアしていただきました。

～特別ヴェーダクラス

「ガーヤトリーマントラハ ガナパータハ」

テキストと音源は、ヴェーダチームのホームページ Sai Veda Library で公開しています。日々唱えているガーヤトリーマントラについて、一語ずつ繰り返し唱える方法「ガナパータ」を練習しました。より深くガートリーマントラを理解し、唱えることができる機会となりました。ヴェーダの唱え方は5種類あります。通常は、サンヒターパータの形式で行います。他にはパダパータ、クラマパータ、ジャターパータなど様々な形式がありますが、ガナパータは、その中でも最も難しい形式です。昔はヴェーダが文字で記されている本などはなかったため、ヴェーダのすべてを暗記する必要がありました。そのため、いろいろな唱え方はヴェーダの言葉を決して忘れないようにするための方法のひとつでした。

そして、ガナパータは特に言葉の繰り返しが多く、力強い唱え方です。ガーヤトリーマントラ of 力強さが際立っていました。

～バジヤン

今回、初めてヴェーダチームとして毎日バジヤンを捧げました。オンラインと言えば毎日ヴェーダを練習する場所でしたが、今回はバジヤンの練習を重ねて捧げました。毎日のプログラムをバジヤンで締めくくることができることは大きな喜びでした。

～御言葉

ヴェーダチームのメンバー9名の方が交代で毎日の司会を担当しました。プログラムの最後には、それぞれに選んだ御言葉とナヴァラートリについてメッセージを発表しました。定例活動でいつも熱心に参加いただいているメンバーの方々に、今回はプログラムを運営するセヴァに参加していただくことができました。オンラインで声を出すセヴァは、多くの場合は家に一人きりで本当に緊張するものです。毎日交代でメンバーの方々が司会をするプログラムは新鮮で、それぞれの思いが伝わり、一体性をもって10日間にわたるナヴァラートリのプログラムを捧げることができました。

9月28日は、第一部のチャンティングで終了し、21時からスタディーサークルチームのスタディーサークルに参加できるようにしました。他のチームによるナヴァラートリの特別プログラムに参加することができ、大いに啓発されることがありました。

10月1日には、帯広グループがアニメーションドラマ「チューラパンタカ物語」を捧げました。これは2018年に帯広グループが北海道合同サーダナキャンプの際に作成したアニメ作品です。ナヴァラートリは、母の慈愛、善が悪に勝利すること、愛がエゴに勝利すること、思いと言葉と行動の純粋性などがメインテーマですが、この物語は、母の愛を象徴する仏陀の慈愛、心の純粋性がエゴを克服することをテーマにした物語でした。

10月2日はミニスタディーサークル テーマ「神聖なる母」を1988年10月14日のナヴァラートリ期間の御講話をテーマにして行いました。母親はナヴァラートリ祭の期間に崇める三女神の象徴であるという御言葉から、母と子の関係を考えました。人生の困難に出会った時に、何より母親の祝福をもらうことで解決できるという体験談がありました。また、肉体の母だけではなく5つの神聖なる母性としての雌牛・大地・肉体を維持する神聖原理・大聖仙・グル（霊性の師）

は、すべてが母親であり母親はこの5つの特性を表すという御言葉から、より広い母なる神についての理解を深めました。

最終日の10日目ヴィジャヤダシャミーは、あらゆる科学に通じ、非常に強力だった、ラーヴァナという邪悪な心の持ち主が倒された日であり、ラーマがアヨーディヤーの都で王位に就いた日でもあります。最終日の特別プログラムは、メンバーが全員で発言をするサットサング（善人との親交）として、ナヴァラートリについての振り返り、日々のサーダナ（霊性修行）、体験について分かち合いました。

以下参加者の感想からの抜粋を紹介いたします。

私は自分の小さな目標を、遅刻しないで、ガナパティプラーラタナーの最初から参加することに決めて、何とかその目標は達成することができました。毎日、とてもスムーズな進行に、どれだけ練習されたのだろうと敬服していました。スピーチも毎日素晴らしくて、聞き入ってしまいました。ひとりでリードするバジャンも、リズムも完璧で、どのように練習されたのだろうかと毎日、感嘆と感動の連続でした。皆様のババへの愛と、ヴェーダへの思いの強さは、比類ないもので私はとてもとて及びません。自分と比べると落ち込んでく

るので考えないで、感動だけ味わっていました。

私も、もっともっと神聖な思いを培ってヴェーダを唱える声やお話をする声に現れるようになったら……。いつのことかわかりませんが、そのときに、来ることを願って皆様を目標に頑張っけてゆけたらと思います。

ナヴァラートリが始まり、身体が元気になってきたように感じられました。通常日々の仕事で疲れるとマイナスな雑念が増えますが、雑念が減ってクリアーになり、良い思考が浮かびやすくなったと思います。ヴェーダの音は神そのものを現しているとスピーチにもありましたが、今通常クラスで学んでいるブルグヴァッリーを練習し始めた時の感覚を思い出しました。何度も聞いて練習するうちに、そこはかたく幸福感が湧いてくるので、なんだろうと思いヴェーダホームページを確認すると、ブラフマンは至福であるというブリグが至福に到達する過程のお話が出ていました。

ヴェーダはまず発音からといわれており、まだまだ正確に唱えられる訳ではありませんが、ブルグヴァッリーの内容にかなりの興味を持っていたこともあり、音が現すそのものの意味のほんの少しだけですが感じられように思えました。

今年はヴェーダチームでの取り組みになりましたが、チャンティング、お話に加えてヴェーダクラス、御言葉、バジヤンも入りとても充実した内容になっていると感じています。しかも、チームの多くのメンバーに捧げる機会を与えていただいていることでチームとしての一体感も感じられ、チームとしての絆も深まっているのではないのでしょうか？ ヴェーダチームにいて本当に良かったと思います。また、スタディーサークルチームとも連携をしてスタディーサークルも取り込まれたことはとても良かったと思います。スタディーサークルチームとも一体感を感じました。

忙しい毎日の中で10日間のプログラムに参加することができるだろうかという不安もありましたが、思い・決意すれば成し遂げられることを実感しました。オンライン定例活動でも毎日ヴェーダチャンティングは行っていただいています。この10日間は自分の中で特別なチャンティングになりました。神様に向かって行く意義を、お祭りははっきりと認識させてくれます。そしてお祭りの後にも続く毎日のヴェーダチャンティングが、この10日間と等しく神性で神に向かうものであることに気づき、感謝が溢れます。ヴェーダチームとしての活動が充実し、明確になった気がします。多くのメンバー、参加者、そしてスワミとのつながりを深め、ヴェーダに浸ることができる

一年で一番すばらしい機会の一つだと感じました。
サイラム

サイラム バジヤンを担当させていただきました。ヴェーダチームでバジヤンの企画は初めてだったのですが、ヴェーダチームの仲間たち、神の仲間たちは結束力がすばらしく、とても協力的でした。私がバジヤンリードをお願いすると、誰もが快く引き受けてくださり、誰にお願いすればよいのか相談に乗ってくださる方、リハーサルコメント係と一緒に行ってくださる方もいらっしや、不安など一つもなく任務遂行することができましたこと、スワミの御業としか考えられませんでした。また、リードシンガーの方々は気になるところが無くなるまで何度もリハーサルにお付き合いくださり、リードシンガーでない方々もコーラスの練習に協力してくださり、バジヤン、一体性をスワミにお捧げできましたこと、皆様、スワミに感謝いたします。 サイラム

※1 ラーマ：トレーターユガにおける神の化身、美德と正しい行いにおける最高の模範。

※2 ラーヴァナ：『ラーマーヤナ』に出てくるランカーの羅刹（悪鬼）の王。

※3 プラシャーンティ・ニラヤム：プッタパルティにあるサイ ババの住まいとアシュラムの総称。至高の平安の館の意。

※4 ラーマヤナ：ヴィシュヌ神の化身ラーマの物語。インドを代表する大叙事詩の一つ。

※5 スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。





<活動報告 4 >

スタディーサークル



開催日：2021年9月5日(日)

テーマ：1976年夏期講習青い山の夏の薔薇 P99-101「マハーバーラタ※1は私たちのための多くの貴重な教訓を含んでいる」

参加者：47名

質問：

- ① 自分が行ったダルマ（正義）が自分自身を守った体験はあるか？
- ② 私たちが良く思っていない人々にどのようなダルマを果たしていくべきか？
- ③ 日常生活においてクリシュナ神※2が示した価値、御教えにどのように従うか？

<参加者のコメント>

「ダルマに関して、例えば真実を話すということがある。自分が実際に本当のことを言っていたが、周りの人に誤解されて『そんなことはない』という言い方をされたことがあった。周りの人が誤解をして自分がちょっと批難されるような目で見られてしまい、忍耐が必要な時期があった。その時に『霊的な教えに沿って生きていこう』と思った。そうするうちに、そういう人達との付き合いが薄れて違う環境に変わっていった。一つのステップとしてそのように導かれていくことがあったと思う」

「経験は思い出せないが、正しい行い（ダルマ）という意味で、絶えず私たちはいろいろな課題を与えられたり選択を迫られる。自分を一番にするのか、あるいは自分以外の者を大事にするのかというときに、損得の感情で言うと、自分よりも誰かを優先した方がある意味で自分が損になることがあったり、あるいは自分の主張をしなければいけないときがあったりすると思う。経験的には自分を後回しにした方が確実に心は平安になる」

「良く思っていないと人々に対して、何かしらの一致点、（折り合いがつかない場合は）それを探していくということ。それが大事なのかなと思う。何かしら食い違いがあり、どうしてもうまく折り合いがつかないのであれば、その方とは関わらない。それはやはり悪いものを見ないということにも繋がっていくと思う」

「以前ある方とお話ししたが、その方が、何を話してもすごく悲観的な所に持っていく人だった。ずっと話しているうちに、ぐったり疲れてしまったことがあった。その時に、自分もそういうところがあるかもしれないと思った。自分にとって良くないと思っている人達というのは、自分に何かを気付かせてくれる。自分にもそういうところがあるのだということに分からせてくれる。そうい

う存在なのだと思う」

「今回このスタディーサークルで学んだ中で一番印象に残ったのは、クリシュナ神が戦争が起こる前に無駄だと分かっているにもかかわらず、戦争が起こらないよう和平のための話し合いを自分の命をかけて行った場面。なぜ私がある場面が印象に残ったかを考えたところ、私自身は自分で考えて無駄だと思ったことはしないという決めつけが結構ある。でも無駄だとわかっているにもかかわらず、ダルマは神へ捧げるものであるということになると、行わないことがアダマ（非正義）になる。やはりこれからは頭で考えても無駄だと思えることでも、それが真実でダルマで大切なことであれば、少しでもそれに気が付いてその行為を行うようにしたいと思った」

「マハーバーラタの物語の全般を見ていると、人間界の様々なエゴの話もあり、恨み言もあり、善と悪の戦いがあり、そこにクリシュナ神という神の存在があり、きちんとした助言を与えてくださっている。やはりその助言の部分を中心に日常生活に活かせるかということだと思う」

<サイの学生のコメント>

「小さな頃から両親に従うことがダルマだと学んできた。今でも自分に関わることはすべて両親と情報を共有して、ダルマを実践している。例えば日本に来てからも『これから研究室に行くところです』とか、『今日はお買い物に行くところです』とか、『今これを買ってきたところです』など小さなことを含めて両親に報告している。一つひとつそうしていくことが自分に自信を与えている。実際にバールヴィカス（子供の開花教室）の頃から『小さなこと一つひとつを両親に共有して教えていく』ということが大事なダルマであると習ってきたので今でもそうしている。実際の体験としてはオンラインスタディーサークルが始まった頃に皆さんにお伝えしたエピソードがあった。ちょうどコロナが始まった頃にイタリアに短期留学をしていて、その時にイタリアで感染爆発が起こってしまった。イタリアの空港が封鎖されてしまって、なかなか帰って来られなかった。そういう時でも、何が起きているのかを30分おきに逐一、ずっと両親に連絡していた。すると母親がずっと寝ないで自宅の祭壇でいつもスワミ※3に話しかけて祈りを捧げたり、『無事に帰って来られるように』とスワミに手紙を書いたりしていた。母親の祈りにスワミが答えてくださったのではないかと思っている。そのような意味で、母

親にいろいろと伝えてアップデートしていくというダルマが、母親のエネルギーをとおして自分を守ってくれたのではないかと思っている。そのようにダルマが結果になって自分に自信を与えている。スワミがおっしゃっているのは『自分の両親を幸せでいてもらう』こと。そのダルマが果たしているのであれば、本当に世界がどうであつたとしてもハッピーなのだ。逆に世界が幸せであっても自分の両親が幸せでいなければ本当に問題。私たちにとって『自分の両親を幸せでいてもらう』ことが本当に大切なダルマであるとスワミはおっしゃっている」

「自分自身も娘であるので両親に対するダルマについて述べたいと思う。本当に自分は両親を愛しているので、両親にいかなる悪いものをも与えないようにしなければならないと思っている。両親に自分に対して本当に満足して幸せでいて欲しいと思っている。そのような形で両親の祝福が自分の人生の中に常にあると感じている。彼らの祝福が常に自分を祝福してくれていると思う。本当に娘としていかなる状況でも彼らが傷つかないようにするということが、その見返りとして自分を幸せにしてくれていると思う」

「(2番目の質問に関して) これは最も難しい質問だと思う。一人ひとりが心に違った感情を抱いている。例えば他の人が行った何かに対して私たちが何か好ましくない思いを抱くとき、そういったことは起こる。ときに外側の世界ではいろいろな事が起こるが、すべての出来事は内的に起こっている出来事なのだと捉えることだと思っている。そしてまた、外で起こるすべての出来事というのは、自分を肉体的にも精神的にも、そして霊的にも強くしてくれるために起こっているのだと捉えようとしている。なので、まずは他者が行なった何かの過ちを赦すことが、すべての人を赦すことの第一ステップで、すべての人を愛していくための第一ステップなのではないかと思う。この様な質問も以前に話し合ったこともあったが、一つのシンプルな答えは、毎日が新しい日だと考えていくこと。昨日起こったことは、ずっと過去のことであり続ける。本当にそれは未来のことには影響しないのだと考えることだと思う。過去の事は、どのようにこれから気を付けなければいけないのか教訓を与えてくれる。それは人々の間の関係性には影響しないのだと考えていくべきだと思う。例えば私たちは皆、火は燃えるものだということを知っている。であればこそ火の取り扱いには気をつける必要がある。例えば料理にそれを使うことができたり、日常生活をより良いものに進歩させることに役立てることができるよう

になっていく。同じように、もし良くないことをする人がいたなら、それが分かったならば、それ以降は気をつけなければならないが、実際には、どのようにそれを赦したり、うまくやっていくことができるかを考えていくことができる。マハーバーラタの中にも非常に多くの悪い人達が出てくるが、神様はすべての人々に関して、人々を矯正したり、正しい道に戻すことをされ続けている。そのような場面で神様はずっと愛し続けて、正しい道に戻るための機会をずっと与え続けていらっしゃる。そして神様が彼らを罰するときにおいても、それは彼らへの愛においてのみ、そうされる。クリシュナ神がマハーバーラタでお話されたことをそのように理解すべきだと思う」

「個人的には本当に誰をも嫌ってはいない。例えば異なった意見などにより他の人を好きではなくなったりするのかもしれない。もし自分とは異なった意見をもっている人や、自分とは違ったいろいろな考え、それが自分と調和しない人を見た場合には、その人はきっと自分とは異なった家庭のバックグラウンドとか、違う種類の友達がいるのだと理解するようにしている。それでも、その人のいろいろな態度などを含めて好きではない場合には、そういった人とは少し距離を置くようにする。もし自分が気に入った人であれば大変親密にすることはあるが、

行いがあまり好きではない人に関しては、そういった行いが自分に影響を与えないように距離を置いたりする。そのようなやり方をおして、すべての人に対する愛情を持つようにしていこうと思う。少なくとも誰をも嫌ったりする必要はまったくないと思う」

「(3番目の質問に関して) 最初に決意することが一番大事ではないかと思う。もし私たちが本当に決意するならば、50%はその時点で達成したと思う。そして実践するためには、最初には自己分析が必要で、自分の実践が欠けている部分についてよく知る必要がある。そしてそれに関して自分の実践を始めることができる。例えば愛のような価値が表現されなければならない。そして最初に愛を拓げるためになさなければならないのは、すべての人に対して微笑みを投げかけるようにしていくことだと思う。それは微笑みと共に、この人が本当に良くありますようにと祈っていくことだと思う。一人ひとりの人間がとてもユニークで独自性のある存在であるがゆえ、人々の考えや思いは必ずしも一致したものではない。したがってときに意見の不一致だってある。表面的には、『あなたとは意見が違うけど分かったよ』、と理解を示すこともできるが、自分の本心と調和させることが必要だ。表面的に相手の意見に理解を示せても、内側ではずっと自分の感じたことをずっと

持ったままになっていて、相手を理解できないこともある。しかしそれでは私たちの成長を助けてくれない。愛を拡げるため、最初に微笑みを投げかける。そして小さな祈りを皆に投げかける。そのような行動を無意識のうちに積み重ねていくことが大事。50%のすべきことが決意するべきことであり、残りの25%がどのようにそれを継続していくかということ。そして最後の25%は首尾一貫性。このようにしながら少しずつクリシュナ神が示して下さった価値をすべて私たちの人生の中に取り入れていくことができるようになっていくと思う。」

「インドでよく言われていることだが、ダルマに関して問題が起こるのは、人々と絡むときにだけ問題が起こる。人々と接するときのみ、ダルマや平安などの問題が起こる。ダルマというものは所属している組織がしっかりとルールを定めている場合には、それに従いながら、職場や日常生活のいろいろなダルマを守っていくこと。それは規則によって簡単になっていくと思う。しかし組織の問題ではなくて個人の話になるとエゴの問題が関わるようになる。例えば人との関係でエゴが満たされなくなると憎悪が生じてきたりする。自分の意見としてはそういった状況の中でもすべての価値のことを日常生活の中でずっと覚えていて、思い出し続ける努力をしていくことが日常生活の

中でそれを実践するために必要なことだと思う」

ババ様の御言葉

もし、ダルマが他のすべての滅びゆくものと同じように消滅できるものならば、それはダルマではありません。ダルマは、滅ぼされたり弱められたりするものではありません。ダルマが不滅のものならば、どこに「ダルマ・スターパナー」（ダルマの確立）という問題があるのでしょうか？それはダルマの実践の確立であり、ダルマそのものの確立ではないと考えるべきです。衰退しているのはダルマの実践であってダルマそのものではありません。

1976年夏期講習青い山の夏の薔薇

※1 マハーバーラタ：従兄弟の関係にあるパーンダヴァ側とカウラヴァ側の間で行われた十八日間の戦争を背景とした大叙事詩。

※2 クリシュナ神：ヴィシュヌ神の化身、ドワーパラユガにおける神の化身 純粋な愛の具現。

※3 スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。

開催日：2021年9月8日(水)

テーマ：プレーマヴァーヒニー第16節「議論することと学識を誇示することを避けなさい」

参加者：56名

質問：

- ① 自分の人生において、もしくは知っているエピソードなどにおいて、霊的知識の誤用や議論が破壊につながった例はあるか？
- ② 霊性修行に没頭することはどのように世俗の心配ごとから影響を受けずにいることを助けると思うか？
- ③ ヴェーダやウパニシャッド※1を日常の実践に移すとき、私たちは「知っている」という意識を消し去り、本質に対して眼を開いて内省する必要があるが、スワミ※2がおっしゃっている内省とはどのようなことだと思うか？

<参加者のコメント>

「元々自分の感覚としては、神といった存在を枠として考えたりすることがなく、広く全体的に捉える傾向だった。身近なところでは宗教を信仰される人と話すと一つの枠の中に限った話となるので、せっかく共通性があっても何か譲らないとお互いに認められないところがあり、会話が続かなくなったことがあった。破壊に繋がったことはないが、やはり皆、人の言葉を聞くというより

も、

言葉で伝えたときには満足を得たいとか認められたいという気持ちがあったりすると思う。また、言葉で論議になってしまった場合は勘違いが非常に誤解を招いてしまうので大きな問題に発展してしまうのではないのかと思うことがよくある。自分自身もそう言うところに注意したい。」

「ある方がバジャン(信愛の歌)のリードをしたいと希望されていた。ただバジャンのリードシンガーになるためにはどんなに真心がありスワミを思う気持ちがあっても、一定のクオリティが必要で、そういう観点からもう少し練習が必要な方だった。私も一員でしかないが、提案して何度か練習したことがあった。しかしその方がなかなかバジャンのリードシンガーになれないということが続いて『もうこんなことだったら、まったく役に立たない。あなたの練習も役に立たない。こんなことなら辞めた』という言葉がその方の口から出た。今となっては本当に反省している苦い思い出だが、やるべきことをやって、その結果はスワミが判断されることが正しい判断だと思っていたのでそう指摘した。自分の中には、『後はスワミに任せるしかないじゃないですか』というような怒りもひょっとして含まれていたのかもしれない。つまり自分が学ぶべきところを、ババの御教えを押し付けてしまったことがあって、その方とちょっと言い争いのようになってしまった。今と

なっては本当に恥ずかしくて反省するべきこと。その意味では私自身が守るべき霊的な知識を与えられたのに、他人に要求してまさに暴言を吐いてしまった。結果としては本当に気まずい思いしか残らなかった。今それを思い出しながら私が高慢だったのだなと思った。」

「例えばプッタパルティ※3に行った時やサーダナ(霊性修行)キャンプで高い山の上へ行った時など、本当に世間から隔離したような所でしばらくの間過ごす体験を何回かしたが、霊性修行に没頭できた。そこが起点となって、霊性修行を行って世俗から離れると、世俗に帰ってきた時に、全然自分が違っていて、いろいろな影響を受けにくくなるという体験をした。」

「このコロナ禍は足の骨折から始まったが、(奉仕の)マスク作りでとても忙しくなり、そしてこのスタディーサークルのおかげでいろいろなスワミの本を読み直す機会や、内省する機会を与えてもらって、コロナよりスワミの御言葉を思うことの方が多くなった。また、大阪サイレディースで朗読会が始まり、いろんな本を朗読する練習をした。お陰様で本当にスワミの御教えを学ぶ機会をいただけて、とてもありがたい。」

「スタディーサークルの中で一人ひとり順番に当てられていく。学校では自分の受けてきた教育の中で、当てられたときに間違えると恥ずかしいので、完璧な言葉を言わなければという気持ちがあった。完璧なものにはまだまだ遠いが、いつも

霊性修行をしながらゆっくりスワミに近づいていこう、自分のペースで近づいていこうと思っている。」

<サイの学生のコメント>

「最後にひどい破壊に繋がったというマハーバーラタ※4のことを思い出す。次にビーシュマ※5とドロナーチャーリヤ※6と、知識をひけらかしたカルナ※7のことも思い出す。サイコロ賭博が行われた時にビーシュマとドロナーチャーリヤは元々どういう意図でパーンダヴァ兄弟※8が呼びつけられたのか知っていた。その意図を知っていたのにビーシュマはそれに対して何もしなかった。ただ、王様に対して王国を守ることを誓った。ドロナーチャーリヤは自分の息子がカウラヴァ※9一族の友人だったので、何も文句を言わなかった。ビーシュマとドロナーチャーリヤは事あるごとに様々な人と議論し、クリシュナ※10とさえも議論していた。にもかかわらずカウラヴァ側には一切何も言うことがなく、ドラウパディー※11が屈辱を受けそうになった事件に際しても何も言わなかった。彼らが亡くなる前にクリシュナから、彼らが行ったことがどのように誤っていたのかを知らされた。二人には十分な権限があったので、クリシュナは『この戦争が起こって非常に沢山の人が亡くなった。そんな

酷いことが行われたのはあなた方二人のせいである。カウラヴァ側に何も言わなかったり、ドラウパディーの件がなければ、こんなひどい戦争にならなかったでしょう』とクリシュナが言った。これが『議論がどれほどの破壊に繋がるか』を示している一例だと思う。また、カルナは非常に弓使いとして優れていたが、霊的な知識を誤用した。パラシュラーマ※12のところに行って弓を習ってきた。パラシュラーマはブラフミン（僧侶）だけに知識を与え、クシャトリヤ（武士）には教えない人だった。しかし、カルナは変装してパラシュラーマのところに行って知識を授かってきた。そしてカルナは学問を誤用することによってアルジュナ※13よりも秀でたいと思っていた。カルナには知識があったので、それによってドゥルヨーダナが自信を得るようになり、パーンダヴァ兄弟と戦おうということになった。クリシュナが『あなたが持っているすべての知識や力はアダルマ（非正義）に根差しているものだ。それはドゥルヨーダナ※14が行っているようなことだ』とカルナに言った。この二つの例は、いかにそのようであってはいけないかということを示している。」

「シュクラチャーリヤ※15はヴェーダやウパニシャドに関する霊的な知識をもっている聖者だった。シュクラチャーリヤがシヴァ※16に

対して大変苦行をしたところ、シヴァ神が『死人を蘇らせることができる』という恩寵を与えてくれた。その恩寵だけでは神への国においてそれほど良いポジションを与えてもらったようにはシュクラチャーリヤは感じていなかった。満足しなかったので怒りを感じ、神様に復讐する為に悪魔になっていった。その結果として悪魔と神との間に戦いが起こった。シュクラチャーリヤは戦いに勝つために、悪魔が死ぬと蘇らせて、神様の方に差し向けた。当然ながらそのような行いは破壊に繋がっていく。オーナム祭※17のエピソードで、バリ王※18が小人のアヴァター（神の化身）に三歩歩いた分の土地をあげるよと約束をした物語がある。シュクラチャーリヤはバリ王のグル（霊性の導師）だったので、『約束を破っても良いから、三歩分の土地をあげてはいけない』とアドバイスした。しかしバリ王は『自分の約束を守らないのは果たして良いのでしょうか？』と言った。シュクラチャーリヤは『自分の命に係わる時には破っても良い』と言った。それによってバリ王とシュクラチャーリヤが長く議論することになり、結局バリ王はグルの話の聞かなかった。本当は理想的なグルは弟子が約束を守れることを奨励すべきだが、逆のことをしてしまった。その結果として非常に苦しむことになってしまった。これは『議論は何も見い出せない』という例。」

「スワミがおっしゃっておられるのは、本当に文献を読んでいるだけでは、究極の最終的な目的地に着くことはできないということ。とはいっても、文献に書いてある道には従わなければならない。このポイントに関しては、スワミ教えてくださっているのは、例えばお腹が空いているとき、ただの食べ物を目で見ただけではなく、実際皿の前に座って、それから皿の上に載っている食べ物を食べなければならない。そのご飯をほんの一口食べるだけでもダメで、それをちょっとずつちょっとずつすべて平らげていかなければならない。そして目の前のお皿の食べ物をすべて食べて初めて、お腹が空いた状態は完全に直る。それと同じように、ヴェーダや文献の学習などを、少しずつ体験していく必要があるが、実際にはこの世界はマヤー（幻）に満ち溢れており、あらゆる困難や喜びなどはすべて非真といえる。少しずつ処方された手法を実践して続けていけば、最終的に自分は神と一つだということが分かっていく。そして、次第に悟っていくことができれば、すべての様々な困難は過ぎゆく雲にすぎないということが分かってくるのだと思う。そして、そういった霊性修行を行っていけば、最後にはもう自分は神であるということが分かるに至る。その様なサーダナを行ってゴールに達した素晴らしい例として挙げることが出来るのがナーラダ仙※19でもあり、ヴァールミーキ※20でもあると思う。元々

ヴァールミーキは狩人であり、最初はラトナーカラという盗賊だったのが、神の御名を唱え始めてヴァールミーキというラーマヤナを書いた聖者にまでなされた。このように、ヴァールミーキは継続的なサーダナによって神に選ばれ、ラーマヤナを全人類のためにもたらすに至った。」

「霊性修行の道というのは本当にゆっくりとした、少しずつの道であると思う。それはずっと続いて行く道だが、ゴールにいつたどり着くのかは誰も知らない。私たちがその継続的サーダナを続けていると、時々神様が試練を与えてくださる。もちろん、いつも100点が取れるわけではないが、ただここでは、試験監督が神様なのだ。世俗的な心配ではなく、そういったことがテストとして、果たしてどれだけ私たちに影響を与えるのかどうか考えていくべきだと思う。時に、困難が起こったとしても、神様がそれを助けてくれて、私たちが何も心配しなくて済むということさえあると思う。私たちが世俗の心配事の影響をどのように避けられるかは、神様が与えてくれた今の状況のテストに対して、私達は上手くやっているだろうかと考えること。心配な状況の中で少しずつ、自分の状態を自分のマインドから切り離して感じることができるようになった時に、その影響を受けなくなっていると思う。心が心配に苛まれる時には、やはりナーマスマラナ（神の御名の憶持）の
実践

が私たちが非常に助けてくれると思う。ナーマスマラナをすることによって、試練が来た時に、神様が与えたテストとしての側面に集中することができるようになり、心配の方にフォーカスしなくてもよくなってくると思う。」

「ヴェーダやウパニシャッドは学び続けることは決して終わることのないプロセス。同じことを繰り返し学んでいくたびに違う見方が得られていく。スワミがおっしゃっている内省というのは、新しい学びを自分に受け入れていくためにいかにオープンであるのかという部分を指しているのではないかと思う。本当に内省を通してのみそれを実践することにつながり、それが本当の教訓につながっていくと思う。例えばガラスの容器がここにあるとして、そこに藁をたくさん詰めたら中身はいっぱいだと思うかもしれない。そこにさらに小さな石を詰めることもできるだろう。一見していっぱいになったように見えても、さらに詰め込むことができそのあとも隙間に小さな砂をさらに詰め込むことができる。それでもいっぱいになっているとは言えなくて、そこにさらに水を入れることもできる。人生もいつもそのようなもの。私たちの人生も新しいことを、新しい教訓を学び続けるためにいつもオープンでいることがより良い。なぜならいつも新しいものを学んでいくべき展望というものがあるし、実際にそういう新しいこと

を学んでいく必要があるから。」

「実際にどのように私たちが知っている知識を実行に移すかということについて、バガヴァン※21が三つのステップを教えてくれている。一つ目は私という意識を取り除くこと。二番目は、いつもそのことについて考え続けること。それがどのように私たちの目を開いて本当の本質に目を向けるか、それがいつもどのように応用するかを考え続けるということ、それが二つ目のポイント。三つ目のステップは、何であれ文献で読んだことに対して、内省していくこと。内省していく時には、常に私たちが五大価値に反していなかったかどうかを考える必要があり、文献で読んだことを何であれ、実際にそれを応用して実践する。それをより良い人間になるために実践していく必要がある。それが内省によって起こること。」

ババ様の御言葉

神はあらゆる姿の中にいます。あらゆる名と姿は神のものです。ヴェーダは、サハッスラシールシャー プルシャハ サハッスラークシャツ サハッスラパート

（普遍なる神は千の頭と目と足を持っている）と宣言して、その同一の特性を述べています。さまざまな種類の宝飾品が金から作られます。同様

に、神はこの世で私たちが見出すあらゆる名と姿をまとっています。ですから、皆さんは神の存在を確信すべきです。もし真摯な努力をするならば、必ず神を顕現させることができます。過去の多くの霊的求道者たちが、熱心なサーダナ〔靈性修行〕と完全な静寂に浸ることによって神を見ることができました。神を見るためには、心を消滅させなければなりません。

2004年11月22日

※1 ウパニシャッド：ヴェーダ聖典群の中の哲学的部門の総称で、ブラフマンの探求を主な主題としている。

※2 スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。

※3 プッタパルティ：スワミの生誕地であり本拠地である町の名前。

※4 マハーバーラタ：従兄弟の関係にあるパーンダヴァ側とカウラヴァ側の間で行われた十八日間の戦争を背景とした大叙事詩。

※5 ビーシュマ：『マハーバーラタ』の英雄でシャーンタヌ王とガンガー女神との間の子。カウラヴァ兄弟とパーンダヴァ兄弟の大叔父。

※6 ドローナーチャーリヤ：ドローナの敬称。『マハーバーラタ』の軍師。パーンダヴァ、カウラヴァ双方に弓術を教えたが、戦いにおいてはカウラヴァ側についた。

※7 カルナ：『マハーバーラタ』の登場人物で、アンガ国の王子。慈悲と寛容さにおいても知られる。カルナとは「慈悲」の意。パーンドウの五王子を産んだクンティ妃の最初の子ともで、太陽神スーリヤを父親とする。

※8 パーンドヴァ（兄弟）：「パーンドウの息子たち」の意。『マハーバーラタ』に出てくるパーンドウ王の五人の息子、ユディシュティラ（ダルマジャ）、ビーマ、アルジュナ、ナクラ、サハデーヴァのご兄弟の総称。

※9 カウラヴァ：クルの息子たちの意、『マハーバーラタ』に出てくる百人兄弟

※10 クリシュナ（神）：ヴィシュヌ神の化身、ドワーパラユガにおける神の化身。純粋な愛の具現。

※11 ドラウパディー：夫の前で辱めを受けてクリシュナ神に救済を求め救われたパーンダヴァ兄弟の共通の妻。

※12 パラシュラーマ：ヴィシュヌ神第六の化身、聖仙シャマダグニ（シャマド・アグニ）の息子として生まれ父の仇を取るべくクシャトリヤの男を大勢虐殺した。

※13 アルジュナ：『マハーバーラタ』の主人公とも言える英雄。パーンダヴァ兄弟の三男。

※14 ドゥルヨーダナ：『マハーバーラタ』の悪役。カウラヴァの百人兄弟の長男。

※15 シュクラチャーリヤ：シュクラの敬称

（皇帝バリの霊性の師だった人物）

※16 シヴァ（神）：破壊を司る神

※17 オーナム祭：神の化身ヴァーマナ（矮人）にその身を捧げた高德の王バりに敬意を表する。

※18 バリ（王）：羅刹の皇帝バリ。プラフラーダの孫。

※19 ナーラダ（仙）：世界に信愛を広めるためにブラフマーが創った聖者。ナーラは「知識」、「ダ」は「与える者」の意。いつも神の御名と栄光を歌っていたことで知られる。ヴィーナの創作者でもあり、ヴィーナを携えて三界を自由に行き来する。

※20 ヴァールミーキ：ラーマの存命中に記されたインドの大叙事詩『ラーマヤナ』（ラーマの歩みという意味の神の化身ラーマの物語）の述者。

※21 バガヴァン：神や半神の呼称、尊神。ここではサイ・ババ様のこと。

開催日：2021年9月15日(水)

テーマ：プレマヴァーヒニー第47節「悪魔ではなく人間でありなさい」

参加者：56名

質問：

- ① 愛に満ちていることはなぜ平安や喜びを与えるのか？
- ② 人が悪魔的に振舞うことになる状況とはどのような場合か？
- ③ そのような状況にあっても人間として振る舞うには何が必要か？
- ④ どのように悪魔的な特質を取り除くことができるのか？

<参加者のコメント>

「愛を考えてみると内側から幸福感がとても満ちてくるので、その中に平安とか 喜びが含まれていると思う」

「自分の心の奥底から満ち溢れる愛。これは本当に何かを求めようとする気持ちはほとんどなく、むしろ周りに奉仕する気持ちになり、それが喜びとか平安に繋がっていくのかなと思う」

「愛に満ちているというのを思い出すのが、子供

が赤ちゃんの時。抱っこしたときに顔が満面の笑みだったりして。そういう時は心配とか不安が何もなく、ただ安心感だけがあって輝いていて、周りの皆もニコニコしている」

「(前略) 人間としての振る舞いには何が必要かといえば、やはり神に向かうことだと思う。神に向かうというのは、例えば、内なる神を意識すること。内側を意識しながら、自分の真我、愛、平安などがあって、何も必要とする物がなく、より自分の本質が、表に出てきて満たされた状況になること」

「本来、人間の本質は愛、平安であるので、自分の感情や欲によって、悪魔的な性質が現れてくると思う。人間的に振る舞うために、例えば私の場合は、いろいろな感情の動揺によって自分の中に嫌な性質が出てきてしまったときには、スワミ※1に手紙を書いて祈るということしかできないかなと思う」

「悪魔的に振る舞うというのは、自惚れや欲、心地よい環境を失いたくないとき、傷つけられたり奪われたりしたような錯覚をもってしまったときに起こりうる状況だと思っている。心が自分をごまかすために、その考えは正しいと信じ込ませようとするが、一日に何回か冷静になって良心の声

を聞くというのが一番の対処法だと思う。スワミがある御講話で『多くの人は良心のささやきを黙殺している』と、とても厳しくおっしゃったことがある。スワミの理想を知れば知るほど、高い理想と感じ、心と身体が邪魔をしてなかなか実行できていないと思うが、良心のささやきを聞いて反省して、スワミへの祈りや感謝に変えていきたいと思う」

「やはり、慈悲によってマインド（思考）を消すということが理想的だと思う。そこに行きつくには、慈悲の心が必要になる。結局、悪魔的になるときというのは、自分の価値観と合わない場面に遭遇したり、不本意な状況に置かれているときになりやすいのかなと思う。すべては神様がいつも見ているテストだと思い、これは解脱へ向かう一歩の階段なのだと思えば、テストにパスしようという点に着目できる。所詮この世の中は自分の思い通りにならないことだらけなのだと思えば、すべて慈悲によって乗り越えるしかないのかなと思う」

<サイの学生のコメント>

「どのように平安というゴールを得るかということに関して、この節の始めのところでスワミが『人間としての本来の特性は幸せや平安を探し求

めることが生来の特性』とおっしゃっている。私たちがもし自己分析すれば、いろいろな思いや行いのすべてが幸せや平安を探すために行われていることが分かる。幸せのタイプによってどれくらい長く幸せが持続するのかは異なるが、それを得るためにグル（霊性の導師）や先生、アヴァター（神の化身）がやってきている。多くのグルや先生が来て教えてくれたことは、『決して私たちは一時的な幸せを探しに来ているのではない』ということ。永続する幸せを探さなければならない。スワミは『本当にすべてに対する無私で無条件の愛だけが、決して変わらず終わることのない平安や喜びを与える』とおっしゃっている。では無条件の愛とは何でしょうか？『何の期待も人にしない』ことが無条件。それは非常に難しいこと。なぜなら私たちの行動は何らかの期待のもとに行われるからだ。』

「一日一日を過ごしていくときに、相手に対して敬意や信頼、あるいは調和が生じていくようにと願っている。その日一日だけではなく、継続して実践する必要があると感じている。そうすることが、内的な心地よさとか平安とかJOY（喜び）になっていくと思う。愛は忍耐するものとか、愛は親切であり、愛は妬まないなどいろいろな言葉がある。それらを実践できればどこに行っても平安を見つかることができると思う。私たちは皆、同じ

ものを欲している。それは内側での平安。喜びに満ちた世界と平安な社会を作るためには内なる平安が必要」

「今日の部分ではスワミが人間と悪魔との違いの鍵を述べていらっしゃる。ここでの悪魔は愛を疎かにして、その代わりに良くない性質の方をより重要であると考え人々が悪魔であるとおっしゃっている。一方で人間とは愛がとても大事な性質であると考えている人々。悪魔と人間のどんな側面に違いがあるかといえば、自分の願望をどのように叶えようとするかという点において違いがある。いつも私たちには何か着目している欲望や、必要としているポイントなど、何かの着目点がある。私たちはいつも、食物や、住む所など、必要を満たそうとしている。そこで問題は、必要な物を求めるための行動は親切な方法であるか、正義に叶った方法なのか、愛を伴った方法であるかという点。そしてときに、私たちの人生においては、その要求を満たしたいという思いがあまりにも強すぎて、残酷な方法や冷酷な方法が採用されてしまうということがあり得る。そういった残酷さ、良くない性質が悪魔の性質。それが今の世界において平安が欠けている理由。そういう悪魔的な道を行かないで人間的な道に行くことを思い出させてくれるのは、やはりスワミのメッセージであり、それに目を向けることだと思う。私たち

はサイの帰依者であって霊的な求道者でもあるので、何をもってしてもスワミを幸せにするような行動をしていく必要がある。そしていろいろなサイの活動、サイセンターの活動においていろいろな人々の交流があるが、それらのすべてにおいてスワミをどう幸せにするのかという視点が大事だと思う。いつでも私たちが悪魔的な行動を行ってしまった場合には、心の中で何か良くないことを行ってしまったということが必ず心のどこかで分かるようになっていく。自分の行為が神から遠ざかるものになっていないかどうかを絶えず考えていることが大切だ。そして、私たちの必要を満たす活動を、それが同時に私たちの霊的な向上にも役立つようなやり方で行なっていく必要がある」

「怒りが生じるのはエゴが傷つくから。では、どのようなときにエゴが傷つくのか。それは、私たちの欲望、とりわけ感覚から生じる欲望が満たされないときである。例えば必要な食べ物が手に入らないときや何か必要な商品とか物があって、どうしても手に入らないと、そのことに対して怒りが生じたりする。また他の人の行動によって自分が傷つけられたと感じた場合に怒りが生じたりする。スワミによれば、これが私たちが怒りを感じるようになる一般的な状況。またこのような悪魔的な性質を簡単に確実に消すことができる最も良い方法はマインドそのものを消滅させることだ。

もし私たちが感覚的な欲望を追い求めれば、必ずそこから怒りが生じることになる。そしてその結果、心の平安も失われる。またスワミがおっしゃるには、そのためにはマインドを終わらせなければならないということ。そして心を消滅させること、終わらせることは霊性修行によってのみ可能。それは特別なサーダナ（霊性修行）を行なわなくとも小さなことから構わない。例えば家を出発する前に必ずお祈りをしてから出掛けるとか、そういったことから始めていくことができる。外出前にガーヤトリーマントラを3回唱えるなどを続けていくと人生にとってとても大きなインパクトをもつようになってくる。これらのことは非常に小さな方法に思えるかもしれないが、それは本当に最も確かな方法であり、それによって愛を培うことができる方法。実際にその愛は培わなければならないのでなくて、最初からそこにあるものとスワミもおっしゃる。」

「完全に悪魔的な性質を取り除こうと思ったら、いつも悪魔的な性質を取り除かなければならないのだということを知っている必要がある。例えば、赤ん坊が生まれた時には、完全に神聖で悪魔的な性質は持っていない。それは私たちが育っていく過程において、悪魔的な性質も獲得してそれが蓄積していると思う。また、悪魔的な性質がどのように私たちが神から隔てているのかということ意識

することで、この性質を取り去っていくことにつながると思う」

「悪魔的な性質は成長と共に習得してしまうもの。しかしこういう悪魔的な性質をもっているということに気付いて、明確にすることがとても大事だと思う。前回のスタディサークルで学んだように、新しいことを学べるようにいつもオープンでいることが大事で、そのためにはエゴを去らせることが大事だと思う。例えばラーマヤナ※2の叙事詩において二人の非常に特筆すべき登場人物がいた。一人はラーマ※3で私たちが偶像化して崇拝しているお方。もう一人はラーヴァナ※4で悪魔的な性質をもっていて、決してそうなりたくないと皆が思う登場人物。ラーヴァナを観察すると、ラーヴァナはいつも自分は完全に正しいと思っていた。ラーヴァナの弟ヴィビーシャナや奥さんが、『あなたのやっていることは間違っている』と言っても決してそれに耳を傾けることはなかった。ラーヴァナは決して耳の聞こえない無知ではなく、あまりにも多くの知識をもっていた。そういう状況にもかかわらず、彼のエゴによって、他者のどんな助言をも受け入れることができなかった。今の時代の世界もまさに様々な形で同じような状況に直面していると思う。私たちが他者を傷つけるようなことがあったとしても、私たちがやっていることが正しくて問題がないと考えている。私た

ちは全て知っていて何であれ私たちがやっていることは正しいと思っているかのようだ。しかしそれがいつも正しいわけではない。なので、まずエゴを去らせて、いろいろな人からの批判をしっかりと受け入れていくことが私たちの中の悪魔的な性質を去らせる唯一の方法だと思う。耳を他者からのポジティブな批判に対して開いているということ。そのようにして改善することができる。そういった意味において、スワミや先生やグルがおっしゃっていることが大切になる。私たちはできるだけ小さな頃から目を開いて、何が正しくて何が間違っているかを分かるようにして、新たな知識に対してオープンでいることが大事だと思う」

「多くの議論はとても大事なポイントを押さえており、大事なことが話し合われたと思う。ある時の御講話でスワミがおっしゃったが、良くなりたいたいと思っている人と、偉大になりたいと思っている人の2種類の人々がいるということ。偉大になりたいと思っている人は、神を見てもその中に人間を見てしまう。でも善良になりたいと思っている人は、人の中にも神を見ることができる。先ほど Bro. Tがラーマとラーヴァナについて話してくれたが、ラーヴァナはいつも偉大になりたかった。ラーマはいつも善良になりたかった。ラーヴァナはブラフマン（祭式の監督）の家系の出身だった

が、彼は悪魔だと思われている。ラーマは人間であったが今日でも神とされている。それはまさに、彼らが人生に対してどのようなものを見方をしたのかということがその違いにつながっている。スワミはいつも執着をもっていたり、感覚への執着をもっている人は悪魔的だとおっしゃっている。またスワミは当時ラーマとラーヴァナは違う肉体として存在していたが、今日では同じ肉体の中にラーマとラーヴァナの両方が宿っているとおっしゃっている。従って、いかなる状況が現れても、私たちは自分の中から悪魔的な特質を追い出していく必要がある。その時の状況に応じて、ラーマや悪魔のような性質が生じているかを観察していかなければならないと思う」

ババ様の御言葉

人間は愛に満ちています。人間のハートは慈悲の泉です。人間には真実を語る力が授けられています。人間の心の特徴は平安です。それは心の生来の資質です。平安を探し求めて、どこか他の場所へ行く必要はありません。

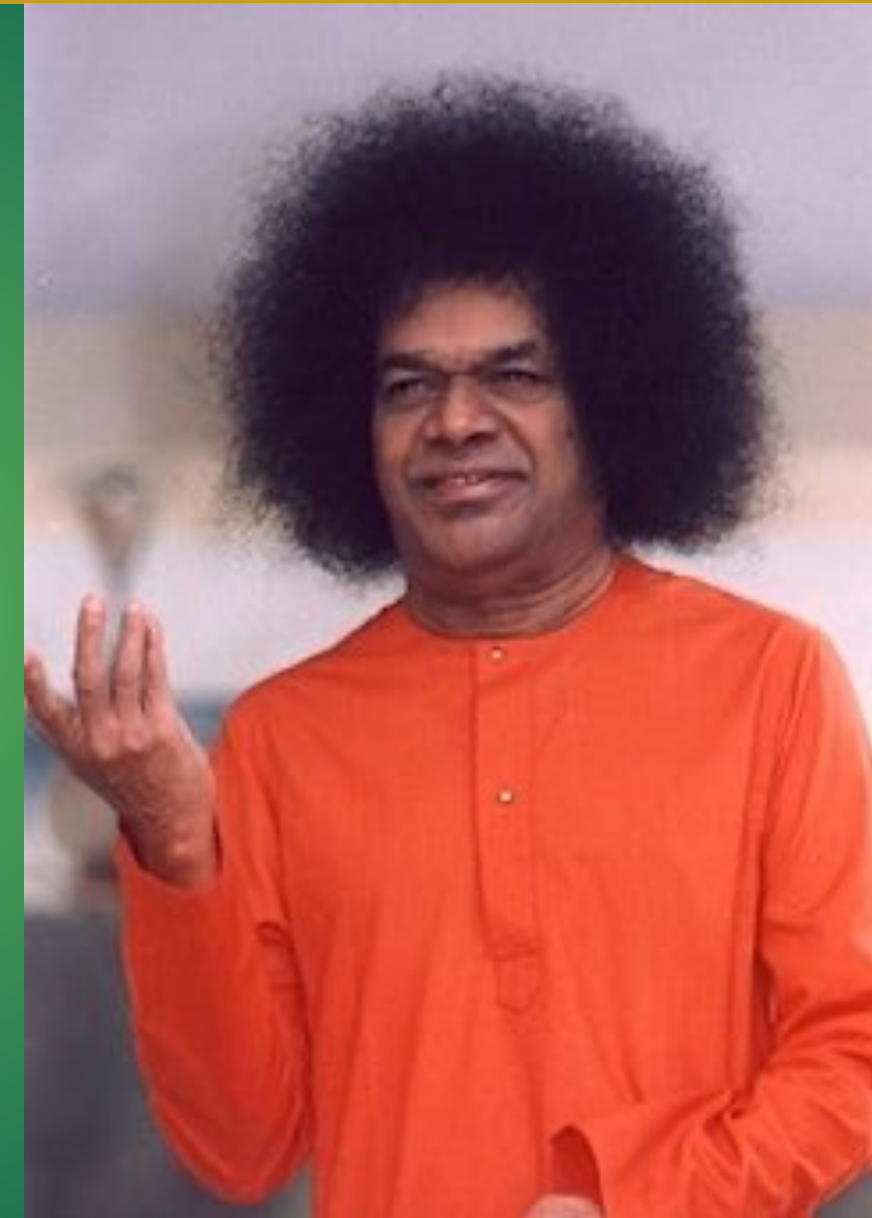
プレーマヴァーヒニー

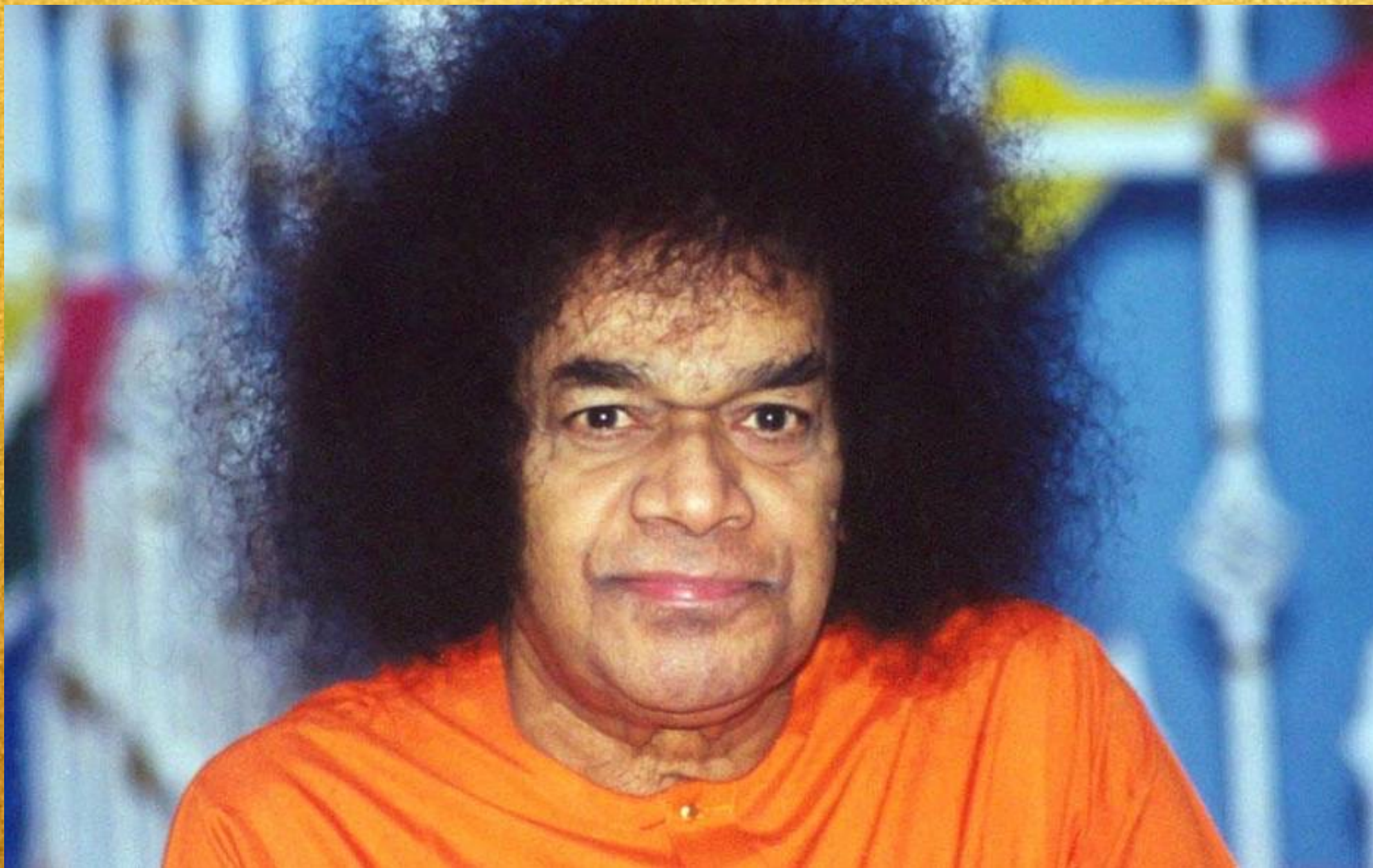
※1 スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。

※2 ラーマーヤナ：ヴィシュヌ神の化身ラーマの物語。インドを代表する大叙事詩の一つ。

※3 ラーマ：トレーターユガにおける神の化身、美德と正しい行いにおける最高の模範。

※4 ラーヴァナ：『ラーマーヤナ』に出てくるランカーの羅刹（悪鬼）の王。





Jai Sai Ram